
Let's **異世界ライフ**！

紫乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Let's 異世界ライフ！

【Nコード】

N0649T

【作者名】

紫乃

【あらすじ】

少々(?)不幸体質な高校生、くさかへやまと日下部大和はある日突然、異世界に飛ばされてしまった。

途方に暮れているとあるギルドに拾われて、元の世界に帰る方法を探しつつ異世界での生活を始める事になるが、大和を拾ったギルドはアクの強い面々だった！

これは大和がギルドの面々に振り回されつつも少しずつ成長していくお話(になる予定)。

プロローグ（前書き）

初めまして、紫乃しのといたします。

初めて小説を書くので見苦しい文章かもしれませんがよろしくお願ひします。

主に気分が乗った時に一気に書くので不定期更新になると思いますができる限り定期的に更新していくつもりなのでよろしくお願ひします。

プロローグ

「それじゃ、いつてきまーす」

俺はいつも通り家族に挨拶を済ませて今日から通う事になる高校に向かつて歩きはじめた。

「ふああああ…」

まだ朝の7時20分。昨日ははやめに寝たはずだがなぜかまだ眠い、転校初日から授業中に居眠りなんてまずい。

ただでさえ前の学校でいろいろと問題を起こしたりしたんだ。新しい学校じゃ平穩にすごしてみせる！

だが、そんな決意も虚しく俺の人生史上一番面倒臭い事がおこりやがった。

「えーと、ここを右に曲がって…ってあれ？」

とりあえず地図通りに来たはずだがどこかで道を間違えたらしくおもいつきり迷ってしまった。

「しかたねえ、少し戻ってみるか…ん？」

俺は来た道を戻ろうとして振り返ってみるとおかしなものをみた。

「なんだ…、これ？」

そこにはさつきまでなかった、「空間が歪んでいる」という表現がしつくりくるような何かが空中にあった。

「なんかやばい気がするな…ここは急がば回れだ…って、あれ？」俺は危険を回避するため離れようとしたがなぜか体が動かない。

というか、体があ空間に吸い寄せられているような…

「って、ヤバイヤバイヤバイこれはすぐヤバイ！」

気がつくとき歪んだ空間が目前に迫っていた。これはもう回避不可能だ！

「うわあああああああ？?!」

神様、あんたは俺のことが嫌いなのかい？転校初日からこんなハ
プニングをプレゼントしてくれるなんて気合いがはいつてるねえ。

なんてことを考えていると完全に空間に吸い込まれてそこで俺の
意識は途切れた。

第一話 山賊との戦いのち新たな出会い（前書き）

初めての戦闘描写、難しかったです。

第一話 山賊との戦いのち新たな出会い

- 気がついたら、俺は森の中で倒れていた。
いったい何が起こったんだ？なんで俺はこんな所で倒れていたんだ？そもそもここはどこなんだ？

落ち着け、落ち着くんだ俺！まずは落ち着いて状況を把握しよう。確かあの変な空間に飲み込まれたかと思っただらここで倒れていた。オーケー、よく分かった。なにも分からんということが。

とりあえず携帯を開いてみたが圏外と。ま、森の中だから当然か。というかこれからどうするかも考えないと。

とりあえず人のいそうな所を探そうと思い、森の中を歩きまわってみることにして数十分、森の中を出られるどころか余計に迷う羽目になってしまった。どこかのだれかが迷った時は動かずに助けをまつべし！とかいっていたような気がするがそんな事は関係ない！こんな状況で誰かが助けがくるとは思えない。

なら自分から行動しなければ未来は切り開けない！……………それが良い方向に転ぶとは限らないが。

「さて、どうしようか…ん？」

周りの茂みから音がしたので思考を中断し、視線を向けてみる。

「おいお前、命が惜しかったら」

「金目の物は全部」

「俺たちによこしな！」

「……………」

なんか、如何にも小悪党といった風情の三人組の男達が出てきた。一人は斧を持ったでっぷりと太った巨漢で、一人はガリガリに痩せているナイフを持ったチビ男、一人は剣を持った筋骨隆々のリーダー格らしい男。

こいつら、山賊か何か？別になんでもいいけど面倒なのに出くわしちゃった。

「なんだお前ら、物騒なもん持って。銃刀法違反で捕まるぞ」

「なんだそりゃ？俺達にや法もなにも関係ねえ」

「奪って、犯して、殺す。それが」

「我らブルーノ山賊団！」

山賊団ね、どうもこの辺りには詳しくそうだしこいつらに道案内させるか。

「ふん？まあ、どうでもいいや。それよりも町とか人のいる所まで案内してくんない？」

「てめえ、口の聞き方に…」

ガリ男がそこまで言うのと素早い動きで俺の体にナイフを突き刺そうとしてきた。

だが俺はガリ男の攻撃をかわしてすかさずガリ男の顎にアップルを叩きこんでガリ男の体を浮かせる。

その無防備な状態になった体に体重をのせた回し蹴りを当てるとガリ男は豪快に吹っ飛んだ。

おお、かなり飛んだな。一応手加減はしたはずだけど。

「お前、よく仲間を！」

ガリ男をやられた事に怒ったのか今度はデブが突っ込んできた。

デブは斧を力任せに振っているが、俺はそれを難無くかわしていく。

「ふんっ！このっ！くそっ！なんで当たらないんだ！」

デブの攻撃を避けるのにも飽きてきたのでそろそろ決める事にした。

デブが斧を吹ってできた隙を逃さずに素早く懐に入り込み、男の急所をおもいつき蹴り上げた。

「% ○* ??!!」

デブが股間を押さえて転げ回りながら悶絶した。

あれは男にしかわからない地獄の拷問のごとき苦痛だ、彼が立ち

直れるのを祈ろう。那無。

「ほう…お前、なかなかやるようだな」

デブが痛みと闘っているのを見てみると、筋肉が切り掛かってきたので、俺はその一撃をかわす。

「まあな。少なくともお前らみたいな連中よりは戦えるつもりだ」

「ほう、なら…試してみるか！」

俺は切り掛かってきた筋肉の剣撃を寸での所でかわしながらじりじりと後ろに下がっていく。

「おうおう、どうした？威勢のいい割にさっきから俺の剣を避けるので精一杯じゃねえか」

「……………」

「喋る余裕もねえのか？それじゃ、そろそろ終わりにしてやるぜ！」

調子に乗った筋肉の動きが大きくなってできた隙を俺は見逃さなかった。

筋肉の腹に三発拳を打ち込む。

「ガッ！」

筋肉がのけぞっている隙に高く飛び上がり、空中で一回転する。

「?!」

その勢いを左足に乗せて筋肉の脳天に踵落としを決めた。

「グハッ！」

筋肉はそのまま地に倒れて気絶した。

「あつ！そういうえばこいつらに道案内させるんだった！」

すっかり忘れてた。どうしよう、取りあえずこいつらを起こすか。

「おいお前ら、とりあえず起き…」

「あ—————！！」

山賊共を起こそうとしたら近くから馬鹿でかさ女の声がした。なんなんだ、一体…。

「リアちゃん、どうしたの？」

「なにがあつたんですか？リア。」
声のした方を振り向いてみると三人の男女がいた。
なんだか面倒な事になりそうな予感…。

第二話 森からの脱出のち街への到達（前書き）

感想、意見等ありましたらよろしくお願いします。

第二話 森からの脱出のち街への到達

「いや、君が山賊を退治してくれたんだ。私はてっきり君が山賊なのかと」

「わかってくれたのなら結構。これからはいきなり火の球を飛ばさないでくれ」

この女・リアと呼ばれていた。が信じられない事に何も無い所に火の球を作りだし俺に向かって撃ってきた。あれっでもしかして魔法？

「すみません、リアが大変な事をしてしまっ

なんて事を考えているといきなり小柄な女の子に謝られた

「いや、気にしないでくれ。面倒な事には慣れてるから」

「そうだ！リアちゃんは悪くない！悪いのは全部この男だ！」

いきなり金髪の男が話にはいつてきた。なんだ、こいつは。なぜかこいつとは仲良くなれそうなのがしない。

「貴方は黙っていてください」

「ガハッ?!」

小柄な女の子が金髪の男の鳩尾に肘鉄砲を決めて男を落とした。いい気味だ。

「…ところで、この山賊達は貴方が一人で倒したんですか？」

「ああ、そうだけど」

「実は私たち、山賊退治の依頼を受けて来たんです」

「依頼？という事は俺はあんたらの仕事を奪っちゃった訳か。」

「そういう事になりますね」

「でも助かったよ。探す手間がなくなったからね」

「よろしければ私たちのギルドに来てもらえませんか？貴方にも依頼の報酬金を支払いますので」

「ギルド？それって街中にあるのか？」

「はい、そうですが…それが何か？」

「えーと、実は俺道に迷って困ってたんだ。だから人のいるところまで案内してもらえたらなーって思ってたんだ」

「そうなの？ここってその気になれば七、八分で抜けられるような小さな森だからそう簡単に迷う事はないと思うけど…」

つまり数十分間さ迷っていた俺は方向音痴だって事になる…。いや、そんな事はない！そんな事はないはずだ！俺は普通よりちょっとだけ、本当にちょっとだけ道に迷いやすいだけだ！

「ねえ、どうかした？」

「へ？！いつ、いや、なんでもない」

一人何かと闘っているかと心配そうにリアに聞かれた。

「それより、早くいこうぜ。もたもたしてないでさー！」

「はい、そうですね。日が暮れて魔物が湧いてきても困りますからね」

魔物：まさか漫画やゲーム以外でその単語を聞くとはな。

さっきの火の球といいもしかして俺、異世界にきたんじゃないか？

「それじゃ、しゅっぱーっ！」

リアの掛け声で俺達は街に向かって歩きはじめた。

俺達は互いに自己紹介したりしながら歩く事三十分弱、街に到着した。

「少し待っていてください。騎士団に山賊達を引き渡してきますので」

小柄な女の子・シラヌイと名乗った。はそう言つと縛り上げられた山賊達を一人で引きずりながら街の門の前にいる兵士らしき人物と話をしてきた。

「これではギルドに報告をすれば依頼は完了です」

「早く帰って休もうよ」

「そうだぜ。さっさと行こうぜ」

リアとアホ金髪・クライスだとシラヌイに足を踏まれながら面倒臭そうに名乗った。が疲れた様子でそういった。俺も知らない所に

突然放り出されたので、実は結構疲れていたりする。

「それではいきましょうか。私たちのギルド、氷狼の爪に」
フェンリルクロウ

第三話 勧誘のち異世界ライフスタート

「ここが私達のギルド、氷狼の爪よ！」
リア達に案内されて俺はギルド・氷狼の爪に着いた。
ここで氷狼の爪を見た感想を一言。

すんごいボロい。

いやまあ、いくらなんでも今にも崩れ落ちそうだって程じゃないよ？

だけどさあ、所々ペンキとかが剥がれ落ちてたり、何力所か穴が空いてたり、「氷狼の爪」って（おそらくそう書かれていると思われる）看板の文字がかすれて読みづらかったり…。

もうこれをボロイと言わずに何と言う？

「あの穴はね、私が十歳の時に魔術で空けたんだ。すごいでしょ！」なるほど。こんなに酷い状態なのは、こいつが要因の一つなのか。

「確かそのあとにウイリアスさんに怒られたんですよね？」

「ウイリアス？その人はお前らの仲間か？」

「うん、ウイリアスはね、真面目で頑固でメガネなんだけど時々優しかったりするんだ」

ふむ、説明は不十分な気がするがどうやらシラヌイと同じ常識のあるほうの人間のようだ。後、メガネは関係ないと思う。

「早くはいろいろぜ、さっさと休みてえよ」

クライスに促され俺達はギルドの扉（建て付けが悪いのかボロいせいなのか開けづらかった）を開くと建物の中は意外と綺麗だった。外のボロさの割には、だが。

「おや、おかえりなさいみんな。」

声がしたので声がしたほうを向いてみると眼鏡をかけた長身の男

がいた。この人がウィリアスさんか？

「ただいま〜ウィリアス。山賊退治してきたよ〜！」

「退治したのは私たちではありませんが」

「細かいな〜シラヌイは。細かいのは自分の身長だけに首に決ま
って苦し苦しクルシイイ？！」

アホがバカを言っているとシラヌイが一瞬で背後に回りアホの首を
絞め始めた。

「…それは私の背が小さいということですか？」

「ヤバいやバいやバいやこのままだと俺、死んだ知り合いと感動の
再開を果たす事にいい？！ああでもシラヌイが俺の首を絞めるた
めに体を密着させてるからちっさい胸が俺の背な」

ゴキッ！

なんかアホの首のあたりから人体から鳴ってはいけない音がきこ
えた。アホがぐったりとして動かなくなっているのとは無関係だと
思いたい。

「私はクライスを部屋まで連れていきますので」

そういつとシラヌイはアホを引きずりながら二階に上がっていつ
た。扱いが酷いな、いつもあんな感じなのか？

「ところで君は？このギルドに何か依頼でもあるのかい？」

「ううん、違うよ〜。ヤマトが山賊を退治したんだ〜。だからヤ
マトに報酬を渡したほうがいいってシラヌイが」

「なるほど。さっきシラヌイかさっき言っていたのはそういう事
ですか。なら報酬を渡しましょう。どうぞ」

そう言つとウィリアスさんは俺にジャラジャラと音がする袋を差
し出してきた。

「はあ、どうも」

俺は報酬を受け取る時、ウィリアスさんが鋭い目でこっちを見て
いたのに気付いた。

「…あの、なにか？」

「…ヤマト君といったか。君はどこかのギルドに所属しているのかい？」

「？いえ…。というかそもそもギルドというものを今さっき初めてしっただんですが」

「なるほど。君の国ではギルド自体が存在しないのか。君は遠くの国や大陸から来たのかい？」

「えと、遠くの国というか、大陸というか、異世界というか…」

「？何か事情がありそうだね。良ければ話してくれるかな」

「まあいいですけど…。実は…」

その後シラヌイと早くも復活したアホが戻ってきたので四人に事情を話した。

「ふうむ、歪んだ空間に吸い込まれて気が付いたら森の中に倒れていた、か」

「異世界かあ。すごい遠い所からきたんだねえ」

「嘘くせえな。こいつ、俺達を騙そうとしてんじゃねえか？」

「失礼ですよ？クライス」

「いや冗談、冗談だつて。だから俺の首に突き付けたその物騒なナイフをしまつて？」

「ヤマト君の言っている事は本当だよ、クライス君」

「なんでそう思うんですか？」

「実は私は三十年程前に彼と同じ様に異世界から来た人間に出会っているんだ」

「ええ〜！そうだったの？！ウィリアスすごい！」

俺以外にも異世界に来た人間がいるのか。詳しく聞いてみよう。

「あの、その人は自分の世界に帰る事が出来たんですか？」

「いや、私もその人物とは少しの間だけ共に行動しただけだからね。自分の故郷に帰る事ができたかは私も知らないんだ」

「そうですか…」

帰る方法は分からないと来た。これからどうしよう…。

「…ヤマト君さえ良ければウチのギルドに住み込みで働いてみな
いかい？」

「へっ？いいんですか?!」

これは願ってもない申し出だ。初めての異世界で行くあてがある
はずもない。仕事や住む場所があるのはありがたいからな。これを
断る理由はない!

「ああ、ヤマト君さえよければ」

「はい！こちらこそよろしく願います！」

「ああ。それでは…」

「」「」「ようこそ！氷狼の爪へ！」「」「」

こうして俺の異世界ライフが幕を上げた。

第四話

異世界初めての朝のち魔法の説明（前書き）

第四話 異世界初めての朝のち魔法の説明

「氷狼の爪」で働く事になった日の翌日。俺は「氷狼の爪」の二階にある一室で目を覚ました。

「ふああああ…もう朝か…」

…ああ、そうか…。俺、異世界に来たんだっけ。まだ異世界に来てから一日しか経ってないけど何かいろいろあったな…。俺って厄介事に好かれてるな、ホント。

しかしこれからどうするかが…ま、とりあえずそれは後にしてまずは起きるか。

そう思ってベッドから体を起こそうとした時、

ドンドンドンドン！ドンドンドンドン！

部屋のドアを叩く音が聞こえた。

「ヤーマトー！起きろー！」

ドンドンドンドン！ドンドンドンドン！

どうやらリアが俺を起こしに来たらしい。だがそんなに大きな音を響かせんでも聞こえてる。

「うーん、起きないな。よし、こうなったら…」

部屋の扉を叩く音が止んだ。どうも違う方法で俺を起こすつもりらしい。とりあえず余計なことをされる前に起きるとする…。

「炎よ、我が手に集え！ファイアーボール！」 ドカアアアアアアン！

「うわあああああ？！」

な、何？！今、扉が燃えて吹き飛んだぞ？！てか、早く消火しないと火事に！

「あゝ、起きてたなら返事くらいしてよ。何考えてるの？」

「お前こそ何考えてやがる！普通人を起こすのに扉を魔法でぶち

破るか?!」

はい、女の子が朝、自分を起こしにくるというラブコメ的シチュエーションを初めて体験しました。感想はドキドキします（命の危機的な意味で）。

「ちよ、お前も火を消すの手伝え！早くしないとここが焼け落ちる！」

俺は消火活動をしながらリアに怒鳴る。

「りようか〜い。それじゃ…」

「早く！」

了解とか言いつつリアは目を閉じて両腕を突き出した。何をやってるんだこいつは…。

「水よ！降り注げ！アクアスコール！」

リアが何か呪文のような言葉を発したかと思うと部屋の中に豪雨が降り注いだ。

「うわあああああ？！」

朝っから俺は突然現れた大量の雨を全身で浴びるハメになった。

「あー…、朝から酷い目にあつた…」

「まあまあ、火はちゃんと消えたんだから」

「そもそも誰のせいで火事になりかけたと思ってやがる」

俺は体中びしょ濡れの状態で朝食をとっていた。

「リアちゃんが起こしに来てくれたというのにすぐに起きないお前が悪い！」

「お前は黙ってるアホ金髪」

「なんだと！このツリ目野郎！やるかコラ?!」

「上等だ！表でろ！」

「やめなさい二人とも」

二人でいがみ合っているとウィリアスさんが俺達の間を割って入ってきた。

「朝から喧嘩はいけないんよ?」

「けどウィリアスさん!こいつが!」

「クライス?」

「すみません」

「ヤマト君もだよ?」

「…わかりました」

ウィリアスさんの迫力に気圧されて仕方なく俺達は形だけの反省をした。てか、ウィリアスさん怒らせるとハンパなく怖え!!

「そういえばヤマト君。昨日は言い忘れましたが今日は私と一緒に来てもらいたい所があるんだ。来てくれるかな?」

「は、はい!」

俺は条件反射で返事をしていた。

「もしかしてフラットですか?」

「フラット?なんだ、それ?」

「それは行きながら説明するよ。それより先に朝食を食べてしまおうか」

「それじゃ、いただきます!」

アホ金髪と睨み合いながら朝食をとった。アホはバカをいってシラヌイにどつかれたりリアが俺の朝食を奪おうとして一戦を繰り広げたりした。

「……ごちそうさまでした!」「」「」

「さて、それではヤマト君。早速で済まないが行くでしょうか」

「はい」

俺は軽く身支度をすませるとウィリアスさんの案内でフラットとやらに行くことにした。

「ウィリアスさん。フラットってなんですか?」

「そうだね。簡単にいうと国のギルドを総合で管理する組織だね」

「ギルドを管理？」

「ギルドというのは民間からの依頼をこなす組織なんだ。その依頼を受理して各ギルドに回したり、ギルド毎にだれが所属しているのかといった情報をまとめたりといった事をするんだ。ちなみにギルドにメンバーを登録するのにもフラットで手続きしないとイケないんだ」

なるほど。今日は俺の登録の手続きのために来てくれるって訳か。

「後、登録する時に簡単な検査のようなものもあるから」

「検査、ですか？何をするんですか？」

「どれだけの戦闘技術を持っているか、魔力の属性はなんなのかといった所だよ」

「そういえばこの世界の人間は魔法が使えるのが当たり前なんですか？」

「そうだね。強弱はあるけどほとんどの人達が使えるよ」

つまり俺にも魔法をつかえる可能性があるかもしれないな。てか使ってみたいっす。

「魔法についても説明しておこうか。」

魔法というのは人が起こせる超常的な現象を一まとめにした呼び方なんだ。

魔法というのはまず種族ごとに使える魔法が決まっていってね。

人間は再生を司る、「法術」。

エルフは自然を司る「精霊術」。

ドワーフは創造を司る「錬金術」。

魔族は破壊を司る「魔術」。

他にもいろいろあるけど一般的にはこの四つをまとめて四大魔法とよぶんだ。

ちなみに私はエルフだから精霊術を使えるよ」

エルフって確か耳が長いかなり長生きするんだっけ。確かにウイリアスさん、耳長いしな。

「魔法については今日はこれぐらいしておくとするか。フラットに着いた事だしね」

気が付いたらいつの間にか中世の城のような建物の前にいた。

「ここがフラットだよ」

「すごっ!」

「さて、それじゃあ行くっか」

なんかただじゃすまない気がするけど…やるしかないか。

俺は気合いを入れるとフラットの扉を開けた。

第五話 適性テストのちストリートファイト（前書き）

更新が遅れてしまいました。もっと早く書けるようになりたいです。後、時間がほしいです……………。

第五話 適性テストのちストリートファイト

「ようこそフラットに！本日はどのようなご用件ですか？」

受付らしき女性が俺達に営業スマイルをむけながら話しかけてきた。それに対してウイリアスさんが慣れた様子で応対していた。

「今日は氷狼の爪の新しいギルドメンバーの登録をしたいのだが」

「はい、了解しました。では登録される方の名前を教えてくださいませんか？」

「彼の名前はヤマト・クサカベだ」

「ヤマト・クサカベ様ですね。では適性テストの準備をします。

準備が整いましたら声をかけますので少々お待ちください」

そういわれて俺はフラットの中をぼんやりと眺めながら待つ事にした。

「お待ちせしました。ではヤマト・クサカベ様、私について来てください」

「あ、はい。わかりました」

「ヤマト君、頑張るんだよ」

俺は受付の女性に案内され一つの部屋に着いた。

「こちらの部屋でテストをおこないます。中にいる試験官の指示に従ってください。それではご健闘をお祈りします」

そういうともう用済みとばかりにスタスタと歩いていってしまっ

た。

「さてと。それじゃ、やるとするかな」

そしてドアを開けて部屋の中に入るとやたらと筋肉マッチョなおッサンがいた。すごいな、どんだけ鍛えてるんだ？

「よう、坊主！俺が試験官のロツクだ！よろしく頼むぞ！」

「えーと、ヤマト・クサカベです。よろしく願います。それ

で、テストつていったい何をするんですか？」

「これからするのは戦闘技術を測るテストだ！ギルドの仕事には魔物退治のような危険なものもあるからな！自分がどの程度の力を持っているか把握するのも大事な事だ！」

「はあ、なるほど」

そういうことか。だけどこの人、絶対素人じゃないよな。俺の力がどこまで通用するかね。

「ところでおめえは武器を使うのか？」

武器か…。正直いつて格闘技は得意だけど武器を使った戦いは苦手だからな…。

「武器は使いません。格闘が一番得意なので」

「なるほどな、よし。俺も一番得意な物でいくとするか！」

ロツクさんはそういうと近くに立てかけてあった槍を手に取った。

「それじゃ始めるか！坊主！」

俺とロツクさんは構えて戦闘体勢をとった。

「ほう。変わった構えだな？」

「よく言われます」

ロツクさんのいうとおりだな。

俺の構えは体は相手から見えて顔以外は横を向き右腕を相手に向けて突き出し、左腕を相手からは見えないように隠している。確かにこれ、変わってるよな…。けどこれが俺のスタイルだからな！。

「さてと、お喋りはこれぐらいにして始めるとするか！」

言い切ると同時にロツクさんは素早い動きで突いてきた。俺はそれを紙一重でかわす。

「なるほど、少しはやるようだな。ならこれはどうだ！」

ロツクさんは大きく槍で払ってきた。

「はっ！せい！」

俺は槍をかわしながら隙を探す。

素手と槍じゃリーチにかなりの差があるから条件的には不利だ。

「これはどうだ！」

今度は連続で突いてきた。

俺はタイミングを合わせて槍をかわしながら相手の懐にとびこむ。

「?!」

ロツクさんが少し驚いていた。俺はすかさず腹に二連続で拳を打ち込んだ。

「グッ！」

ロツクさんが呻いた。そうしてできた隙を逃さず顔にハイキックを決めた。

「グハッ！」

するとロツクさんはおもいつきり吹っ飛んだ。そして頭から壁に激突した。ヤバい、やり過ぎた！

「す、すいません！大丈夫ですか?!」

「あ、ああ。なんとかな」

ロツクさんはそういうと体についた壁の破片やらを払い落としながら立ち上がった。頑丈な人だ。

「やるな、坊主。手加減したとはいえ俺に勝つとはな」

あれで手加減してたのか。本気でやられてたら危なかったかもしれん。

「坊主はどこでその武術を習ったんだ？」

「俺の父親に無理矢理教え込まれたんです」

俺の家はいわゆる道場で、親父が師範をやっている。親父は化け物みたいなでたらめな強さを持っていて、幼い頃からその技術を叩き込まれた。そのおかげが不良百人を同時に相手をしても余裕であしらえるくらいの強くなれてしまった。俺、かなり人間離れしてるような……。

「なるほどな。よし、とりあえず戦闘技術のテストはこれで終了だ。次は魔法適性のテストがあるから案内するぜ」

魔法か…使えるものなら使ってみたいぜ。

「よし。ついて来い坊主」

「ヒエツヒエツヒエツ…。あんたが次の実験…ゴホツゴホツ…ギルドの新人かい」

俺はロツクさんに連れて来られて、黒いローブを着たバーさんのいる部屋にいた。てか今実験台つて言おうとしなかったか?! なんかいきなり帰りたくなつてきたんだけど!

「あたしゃニイメというもんさ。それじゃ早速仕事に入るとするかね。とりあえず座りな」

ニイメさんに促されて俺は椅子に座った。

「じゃ、この水晶に手をあてな」

俺は円状のテーブルに置いてある水晶に手をおいた。

「…ふむ…なるほど…む?…おりよ…これは…なんと…」

なにやら水晶を見てブツブツと言っていた。なんだ、一体?

「…あんたの魔力と属性がわかったよ」

お。終わつたらしい。早いな。

「それじゃまずは属性からいくよ」

俺はいつたいどんな魔法がつかえるんだ? なんかワクワクしてきた!
た!

「あんたは空、闇、火の三つの属性の持ち主だよ」

「はあ…。あの、闇と火はなんとなくわかるんですけど、「空」はどんな属性なんですか?」

「空は天候に関係するものを操る事ができる珍しい属性さ。例えば雨や雪を降らせたり、雷を落としたり、といった所さ」

それってなんかすげくね? それさえあれば…体育祭当日に雨を降らせて中止にするなんてことが!

「次は魔力だが…あんたの魔力はどういう訳かとても低いんだよ…」

「? 低いとまずいんですか?」

「そうだね。普通は使える属性が多ければ多いほど魔力も比例して高くなるんだが…あんたはどういう訳か普通の人間の十分の一に

も満たないんだよ」

「えっ？それってつまり、俺は魔法がつかえないんですか?!」

「そういうことになるかね…残念だけど…」

俺は頭を叩かれたかのような衝撃を受けた。せつかく異世界に来たんだから魔法の一つや二つ使ってみたかったのに……。

「どうにかして使えるようにはならないんですか!」

「まあ、魔力は訓練を積みれば総量をあげる事もできるけど……

あんたはそれでも下級の中の下級魔法を一つ使えばいいほうだね」

「そ、そんな…」

うっ…魔法が使えない…せつかく異世界に来たのに!

「とりあえず魔法適性のテストはこれで終わりさ。なにかあったらまた来な。力になってやるよ」

おお、人を実験台とかいってた割に意外といい人やん。

その後俺はニイメさんに言われて受付でギルドへの登録が終わるのをまつた。

「お待ちせしました!ヤマト・クサカベ様のギルド登録が完了しました!こちらはヤマト様のギルドカードになります。これがあればギルドで依頼を受ける事ができますのでくれぐれも無くさないようにご注意ください!」

よし、とりあえず制服のポケットにでもいれておくか。

「ヤマト様、お手数ですがヤマト様の出身国をカードに記入していただきたいのですが」

「しゅ、出身国?」

どうしよう、まさか異世界だなんて書くわけにはいかないしな。てかまずこの世界の言葉を書くことができねえ。なぜか話しをすることはできるが。

俺だけではどうする事もできないのでウィリアスさんに助け船をだしてもらったことにした。

「ウィリアスさん。助けてほしいんですけど」

「ああ、私がヤマト君の代わりに書くよ。ヤマト君の出身国はどこかな？」

「とりあえずここは正直にこたえるか。」

「日本です」

「ニッポンか」

「そういうと、ウィリアスさんはカードに書きこんだ。…今度、こちの言葉を教えてもらおう。」

「これで俺も仕事ができるようになったか」

ギルドの登録を終えて俺達は住宅街らしき所を歩いていた。

「そうだね。………ちょっとカードを見せてもらえるかい？」

「はい。いいですよ」

俺はウィリアスさんにギルドカードを渡した。するとカードを見たウィリアスさんは驚いた顔をした。

「………なるほど、ありがとう。返すよ」

俺はウィリアスさんからカードを受け取った。なにかおかしい所でもあったのか？まあ、別にいいけど。

「とりあえずこの後はこの街を案内するよ。一緒に来てくれるかな」

「はい。お願いします」

俺はウィリアスさんの案内でこの街を見て回る事になった。

その後俺は街の住宅街やら公園やらを見て回った。そして俺達が商店街を歩いていると、

「なあにいつてんだい！！ルールも守らねえで一流ギルドの一員だとかいってんじゃないよ！！」

「ああん？もいっぺんいつてみるー！」

「何度でもいつてやるよ！この豚男！」

「て、てめえ…覚悟はできてんだろうな！」

「だ、だめだよ…キルマちゃん。そんな事いつちゃ…」

なにやら店の前にできた人だかりの中心で怒鳴り声が聞こえた。

「…おや？この声は…ヤマト君、ちよっと一緒に来てもらえますか。君の力が必要になりそうです！」

「え？！ちよ、ウイリアスさん？！」

ウイリアスさんに手首をつかまれてひきずられていった。まさかあの騒ぎを止める気？！

「上等だ！とつとと武器をだしな！」

「この女！吠え面かかせてやるよ！」

人だかりの中心には今にも流血沙汰に発展しそうな雰囲気な筋肉質の女性と太った男と女性を止めようとする可愛らしい女の子がいた。

「なにをやっているんですか！キルマ！」

「お、ウイリアスじゃないか！聞いてくれよ！この男が店で割り込みをしたんだよ！それであたしが注意したらこの豚男が逆ギレしやがって喧嘩売ってきやがったんだ！」

「はあ…全く本当に貴女は血の気が多いですね…」

ウイリアスさんがため息をついていると女の子がトコトコと近づいてきた。

「ごめんなさい、ウイリアスさん。僕、頑張って止めたんだけど

…」

涙目になりながら女の子が謝ってきた。仕草がいちいち可愛いな。アホ金髪なら絶対ナンパしそうだ。

「いいんだ。カイのせいじゃないよ」

それを笑って許すウイリアスさん。イケメンが可愛い女の子に笑顔を向けるのって絵になるな…。…………別に悔しくて泣いてなんかいいんだからね！

「…あの…あなたは…？」

「へ?!」

女の子に話しかけられたので俺は女の子に気づかれないうちに目からでてきた汗をふきながら（けっして涙ではない）答えた。

「俺は大和・日下部。えつと…」

「ヤマト君は氷狼の爪の新しい仲間だよ」

「そうなんですか。僕はカイといえます。よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

互いに自己紹介をしているとまた女性と男が喧嘩を始めようとしていた。

「ヤマト君。ちょっと止めて来てくれないかい？」

俺はウィリアスさんに言われて二人の間に割って入っていった。

「あんたら少し落ち着け。落ち着いて話しあおう」

「ああ?なんだ、このガキ!」

「なんかあんたが割り込みをしたのが原因らしいな。ならちゃんと謝りなつて」

「そうだよ!男が自分の間違いを認めないなんてカッコ悪いよ!」

とりあえず正論をいってみたがどうも逆鱗に触れたらしく、男はいきなり殴り掛かってきた。

「ぶつ殺す!」

はあ。結局こうなるのね。ウィリアスさんが一緒に来てくれといったのはこういうことになるかもしれないからか。

まあいいや。適当に遊んでやるか。

「オラア!」

男が俺の顔に向かってパンチをくりだしてきた。が、それを軽くかわすと男は少しよろめく。

「遅いパンチだな。腕に錘でもつけてんの?」

「んだとお?!」

わかりやすい挑発にのつた男は激しいラッシュをかけてきた。だが俺にとっては大した早さじゃない。

「ハア…ハア…」

もう息上がってるし！もうちょっと頑張れよ！
だがこれ以上時間をかけるつもりもないし、そろそろ終わらせる
か。

「あらよつと！」

「ガギユ！」

男の顎に向けて下から足のつま先で宙に蹴り上げてやった。おお、
我ながら飛んだな。五メートルは上がったな。

「ゴブ！」

そして背中から地面に叩きつけられた男は口から血を流して白目
を向きながらピクピクと体を震わせていた。…これ、死んだりして
ないよね？

「おお！やるねえ！」

女性がなにやら感心していた。まあ、ちょっとだけ本気だしたし
な。

「おい！そこのお前達、何をしている！」

なんか遠くから鎧を着込んだ連中がこっちに向かって走って来て
いた。

「まずいな。騎士が来た。ヤマト君、カイ、キルマ、早く逃げる
ぞ！」

「は、はい」

「あいよ！」

「え？ちよ、待って？！」

三人が逃げるように（実際逃げていたが）さっさと走っていった
ので俺は見失わないように三人を追いかける。

なんで俺の日常はこうもトラブルが舞い込んでくるんだ……………。

第六話 受け入れ難い現実のち初めての依頼

「へえー！あんだウチの新人かい！あたしはキルマ。よろしくたのんだよ！」

なんとか騎士達を振り切って氷狼の爪に帰ってきた俺達は一階に集まって話をしていた。

ちなみに俺が異世界から来た人間だって事はキルマとカイにも説明済みだ。二人ともわりとすんなりと信じてくれた。

「キルマちゃんと僕は兄妹なんだ……」

「兄貴は女みたいだなリしてるけどいいやつだからさ。仲良くしてやってくれよ！」

「ああ、こつちこそよろしくな」

俺は新しい仲間達との自己紹介を終えた。なんだか賑やかになりそうだな……？

兄貴？

おかしいな？なんか聞き間違えた単語があったような……？

「なあ、キルマ。ちよつといいか？」

「なんだい？」

「今……誰の事を兄貴っていったんだ……？」

「誰って……」

キルマはカイの事を指差す。

「え……」

……………うーん。どうにも俺は白昼夢を見ているらしい。だってこんなに可愛い子が男な訳がない。よし、とりあえず夢から覚めよう……。

「あれー？おかしいな、なかなか覚めないぞ？この夢？」

近くの壁に頭を何度もぶつけて現実に戻ろうとしているとアホが

俺の正常な判断に基づく行動を力づくで止めてきた。

「おい！気持ちは分からんでもないが落ち着け！」

「放せ！邪魔をするな！俺は現実に戻るんだ！」

「現実はこちらだ！カイは真正銘の男だ！」

「う、うん…僕は男の子だよ…」

オドオドしながらカイが答えた。

「……………本当に？」

「うん…」

……………どうやら嘘でも冗談でもないらしい……………。……………すごく不本意なことだが仕方ない。これが現実だとみとめよう……。

だけどこれ、カイが女の子だって言われて百人中百五人が信じると思うよ？真面目な話。

「ところでヤマトはギルドの登録を済ませたばっかだったね。依頼はどんなのを受けるつもりなんだい？」

ウィリアスさんが話しかけてきたのでとりあえず気持ちを切り替える事にする。

「依頼か……。ウィリアスさん、依頼ってどんなのがあるんですか？」

「そうだね…氷狼の爪は基本的には人探し、物品の調達、魔物退治などいろんな種類の依頼がはいつてくるんだ。今入ってる依頼は……………迷子のペット探し、薬草の調達、ゴブリン退治だね」

ふーむ。ペット探しはなんだか時間が掛かりそうだ。薬草は種類とかよく分からないからパス。ゴブリン退治は……………ちょっと詳しく聞いてみよう。

「ゴブリンって魔物…なんですよ。どんな奴なんですか？」

「ゴブリンは鬼系の魔物んだけど繁殖力が高くて群れで行動してるんだ。けど一匹一匹の強さはたいしたことはないからヤマト君なら大丈夫だと思うよ」

「はあ、ならゴブリン退治にしてみます」

「よし、ならヤマト君の初仕事はゴブリン退治だね。とりあえず

仕事に慣れるまでは誰かについてもらおうといいだろう。リア、クライス、ヤマト君を手伝ってやってくれ」

「りよーかーい！ヤマト！私がいれば百人前だよー！」

いきなり不安な奴がきたな。百人力を百人前と間違えてるし。

「えー？！なんで俺が」

「……………」

「ウス！男クライス、誠心誠意頑張らせていただきます！」

アホがウイリアスさんとシラヌイに無言の圧力をかけられて（シラヌイはナイフを構えていたが）従っていた。

「そういえば、ヤマト君は武器を持つていなかったね」

「まあ、俺は素手での戦いの方が得意なので」

「だけど魔物相手になんの備えもないのは少々心もとないな」

確かに俺も何か防具のような身を守る物がほしいです。痛いのは嫌なので。

「私の知り合いがやっている鍛冶屋があるからそこで見繕ってもらうといい。私の紹介だといえ君に合った武器や防具を造ってくれるよ」

ウイリアスさんのオスメらしいな。なら大丈夫だろう。

「うげっ！あの偏屈オヤジの鍛冶屋かよ！」

だがウイリアスさんの言葉を聞いたクライスが途端に苦虫を噛み潰したような顔をした。

「偏屈オヤジ？なんだそりゃ？」

「ウイリアスさんが言った鍛冶屋のオヤジはすごい頑固なんだ。気の向いた時にしか仕事をひきうけねえし、時には依頼人を怒鳴って追い返したりするんだ。ウイリアスさんが頼むとなぜか引き受けるんだけど」

マジか…大丈夫かな。アホのいうとおりなら造ってくれるっばいけど、苦手なんだよなー、頑固な人って。

「彼ならヤマト君に合った武器を造ってくれるさ。お金なら昨日渡した分で大丈夫だと思うよ」

なんだか不安だがとりあえずここはウィリアスさんを信じて行ってみるか。

「ヤマト、俺は鍛冶屋の外で待つことにするから、リアちゃんと二人で武器を造ってもらって来てくれ」

「ん？ああ」

「オツケー！」

とりあえず寄り道しないでさっさと行ってこよう。この二人（特にリア）が何か面倒を呼び込まないうちに。

第七話 爆発のちマイ武器GET

「あゝ…、なんで俺が男の面倒を見なきゃいけないんだ……。美女や美少女なら喜んで付きつきりでイロイロと教えただけだな」

「お前っていつもそんな事ばっかいつてんのか？ そうだとしたら間違いなく今の発言で女の子からの評価が落ちると思うぞ」

「ほらほら二人とも、早く早く！ おいてっちゃうよ」

鍛冶屋への道を三人で喋りながら歩く（約一名無駄に走り回っているが）。

「そもそもあの偏屈オヤジの所に行くってだけでも気が滅入るのに、なんでお前を連れていけなくちゃならないんだ…」

「ウイリアスさんに頼まれたからだろう」

実際は脅迫といったところだろう。

「わかってるっての！ …… あゝあゝリアちゃんと二人つきりならデートと洒落込んで楽しむことができたのに！」

こいつは女の事しか頭になんかいない。アホと呼ぶにふさわしい思考回路をしとんな。

「二人ともなに話してるの？ 私も話しに入れて」

そんなこんなで三人で大体三十分ぐらい喋りながら歩いていたら目的地に着いた。

「ここがウイリアスさんのいつていた鍛冶屋か」

鍛冶屋は街の外れの方にあつた。見た感じは煙突のある大きめだがまあ、レンガでできた普通の家ってかんじだ。鍛冶屋って意外とこんな感じなのか？

「とりあえず俺は外で待ってるぜ」

「えゝ！ クライスも一緒に行こゝ！ はゝやゝゝゝ！」

「すまないリアちゃん。君の頼みでもこればかりは…」

アホがそこまで言いかけた瞬間、

「だからって周りに迷惑かけたらいけないだろ！頼むからあんたは少しくらい教科書通りにやってくれ！」

おお、アホがなんだか常識人に見える！

「ところでその坊主はなんだ？」

「さらつとスルーしてんじゃねえ！」

アホのツツコミは流された。なんかちよつと可哀相だ。

「俺は大和〓日下部といいます。ウイリアスさんにいわれてここで武器を造ってもらおうように言われたんですが……」

鍛冶屋無くなっちゃったけど大丈夫なのか？これ？

「ほう？おまえさんが氷狼の爪の新人か？わしは武器職人のカーリーだ。よし、ちよつと待ってる」

カーリーさんはガレキの山をどかしながらなにかを探していった。そしてなにやら大きな釜となにかの岩らしき物を抱えて戻ってきた。

「よし。坊主、ちつと両手を見せてみる」

そういわれて俺は両手を見せた。

「……なるほど。坊主、今からお前に合った武器を造ってやる。そういうとカーリーさんは釜に持ってきた岩をいくつか入れてなにやらブツブツ言いはじめた。もしかしてこれが錬金術？」

「なあ。爆発とかはしないよな？」

「………しない………と信じたい………」

とりあえず爆発しない事を祈りながら見守ること数十分。かなり汗をかいたカーリーさんがなにかを持って戻ってきた。

「ほらよ坊主。こいつがお前さんの武器だ」

カーリーさんから渡されたのはそれぞれ赤と青の色をしているナツクルだった。なにか甲の部分に妙な模様が描いてある。

「そいつにはある魔法をかけてあってな。まずは着けてみな」

俺は頷くと赤いナツクルを右手に、青いナツクルを左手にはめた。

「それじゃ、まずは赤い方を前に突き出してみな」

とりあえず突き出してみる。なにが起こるんだ？

「そうしたら「フレア」と言うんだ」

「はあ……。………… オホン、「フレア」！」

「フレア」というと、なんと手から炎が放射した！

「あつつう?!火が!火が!」

そして前に立っていたアホの服に火がついた。あら、たいへん。
「よし、次は青い方をあいつに向けるんだ」

アホに向かって青いグローブを突き出す。なんかアホが「おい!んな事してないで早く消火活動しろ!」とか叫んでいるが、まあ気にしない方向で。

「そうしたら次は「フリーズ」だ」

「「フリーズ」!」

俺がフリーズという今度はアホが一瞬で凍りづけになった。お
お!すげえ!

「どうだ坊主。こいつがあれば魔力がないお前さんでも魔法が使えるぞ」

「まじすか?!よつつつしゃああああ!!!!」

思わず叫んでしまった。けど魔法がつかえる!すごい!これをすごいと言わずして何という!

「さっきの呪文を唱えるとそいつを装備している奴の魔力を消費して魔法を発動する。これならお前さんでも魔法が使えるって訳だ。けどお前さんの魔力じゃ一日十回程度がやっとだ。使い所に気をつけな」

十回か…まあ、それだけでも十分か。

「あれ?でもなんで俺が魔法を使えないの?」

「ウィリアスから連絡がきてな」

そうなのか。納得。なんかの魔法で伝えたのか?

「ねーねー。ところで話は終わったー?終わったら早く魔物退治いこー?」

あ、そういえばそうだったな。

「これ、ありがとうございます。大事に使います」

「おう、大事にしてやってくれよ」

「あ、そうだ。代金を……」

「それなら気にするな。ウィリアスの頼みだからな」

「はあ……」

なんか悪い気もするがとりあえずいうとおりにしておくか。

「よし！それじゃ気合い入れていきますか！」

「それじゃしゅっぱーっ！」

俺は初めての依頼を成功させるために魔物がまつ場所へと歩き始めた。

……あれ？何か忘れているような……？

「……おい……俺のこと完全に忘れてるだろ……」

第八話 魔物退治のち痴話喧嘩？（前書き）

また更新が遅れてしまいました……。もっと早く書けるようになりたいです。

第八話 魔物退治のち痴話喧嘩？

「ぶえつくしゅい！」

あの後、アホが凍りづけになっているのを思い出した俺達はさっそく「フレア」で氷を溶かしてアホを救出した。

「うう…なんで俺がこんな目に……………」

「きつと普段からアホなことばっか言っているからだろう」

「たったそれだけでかよ！酷すぎじゃねーか！」

「……………」

「おーい、そこで無視するのー？俺の扱い酷いぞー？」

アホがなにかいっているがとりあえず気にしない。

ちなみに今俺達はゴブリンがいるという森の中にいる。よし、今度は絶対に迷わない！

「やつこさんなかなか出てこないな」

「いないねーゴブリン。よーし、なら…」

リアは何かブツブツ言っつて右手を前に突き出した。ってこいつまさか！

「炎よ、我が手に集え！ファイ……………」

「ちよつと待てえ！」

「ムガムゴ?!」

俺は瞬時にリアの口を塞ぐ。あつぶね、危うく一面焼け野原になることだった。

とりあえず手を離してやるとリアは俺に対して怒りを表にしていた。

「何するのヤマト！いきなり女の子の口を塞いで！」

「何するの！はこつちの台詞だ！なんでお前は困ったら燃やそうとするんだよ！その辺の放火魔よりタチ悪いわ！」

「いいじゃない。木が無くなれば見通しが良くなるよ」

「森一つ燃やしたら間違いないく豚箱にぶち込まれる事になるわ！」

俺とリアが数分間言い争っているとか何か近づいて来るのを感じた。

「あ」

アホがアホみたいなどぼけた声を出した。けどそれもそのはず。

気がついたら全身緑色の小鬼のような奴らに囲まれていた。うーん

…二十…いや、三十はいるな、こりゃ。

「ニンゲン、ニンゲン」

「コロス、コロス」

「タベル、タベル」

わ、なんか物騒な事言つてやがる。

「ヤマト！これがゴブリンだよ！」

あー、そうなんだ。てか多いな！。これだけいると退治するの大変じゃね？

「うわ、数多いな！めんどくさ！」

「いきなり囲まれてるけど大丈夫かよ」

「大丈夫大丈夫！どうにかなるよ！」

なんでそんなに樂觀的なんだ、コイツは。

「ニンゲン、ニンゲン」

「コロセ、コロセ」

やばいな、今にも遅いかかってきそうだ。

「ヤマト、ちょうどいい。ここら辺で俺の実力つてやつを見せといてやるよ」

そういうとアホは一步前にでた。

「そして、リアちゃんは俺の活躍ぶりに惚れて、そのままいつきに大人の階段を三段飛ばしで………ウヒヒヒ」

「お前の行動原理はそんなんばっかなのか?!」

アホは顔がにやけながら気持ち悪い笑い声を発した。やっぱりダメだ。返り討ちにあうよ、コレ。

「さてと、それじゃあやるか！「スレイプニル」！」

アホが顔を元に戻し、呪文を唱えたらアホの目の前にいきなり剣

が現れた。おお！ただのアホじゃなかったんだ！

「リアちゃん！俺の活躍しっかり見ててくれよ！」

俺に自分の実力を見せるんじゃないやなかったんかい！

「いくぜ！」

アホはゴブリンの群れに突撃し、一太刀で一気に五匹のゴブリンを倒した。なかなかやるな。

「っと、俺もやんねえとな。「フリーズ」！」

俺が呪文を唱えると数匹のゴブリンが凍った。「あらよっと！そこにすかさず体重を乗せた蹴りを当てる。すると凍ったゴブリンは粉々に砕け散った。うお？！スプラッタな場面よりもなんかグロイ気がする！」

「それじゃ私も！天雷よ、数多の敵に降り注げ！、「スパークボルト」！」

今度はいきなりゴブリン達に雷が落ちてきた。ホント魔法ってなんでもアリやな。

「ふん！」

俺は感心しながらゴブリンの顔をおもいつきり殴る。

ゴブリン達はさつきからうるたえて、まともな判断をできないよ
うで戦おうとも逃げようともしない。

「よし！ゴブリン達がほうけてるスキにいつきにきめるぞ！」

「…ふう、ざつとこんなもんか」

ゴブリンとの戦闘とらつかうんさいどゲームが始まって十数分。ゴブリン達の死体が周りに
転がっていた。

「さすが俺。この程度の奴らじゃ相手にもならないとは…」

「ゴブリンってたしか弱い魔物だってウイリアスさんが言ってた
けど？」

「うるせーな！細かい事を気にしてんなよ！それよりさっさと討

伐の証明部位のこいつらの角を剥ぎ取んぞ！」

「証明の証？」

「魔物を倒したら倒した証拠としてそれを証明できる部位をもつていくんだ。ちなみにゴブリンの証明部位は額の角だ」

なるほど。確かにそうじゃなきゃズルをする奴がでてきそうだ。

「えい！」

ふと横に目をやるとリアがゴブリンの角をへし折っていた。

「ヤマトもやってよ〜！これ、大変なんだから〜」

「ん？ああ、わかったよ」

そういつて俺は近くに転がっていたゴブリンの死体から角を剥ぎ取る。リアは大変とか言ってたがそれほど力はいらぬな、コレ。

「よっ」

「よいしょ！」

「よっこいせ！」

そうして角を剥ぎ取っていく。気がつくとも角は五十本は集まっていた。

「こんなに倒したのか俺達」

「さてと、それじゃ帰ろうぜ」

「うん！早くご飯食べよ〜！」

集めた角はアホが持ってきた袋に詰め込んで俺達はギルドに戻る事にした。ああ、早く帰って惰眠を貪りたい。

「たっただいま〜！」

「お帰りなさい、リア、ヤマト君、クライス」

「ウィリアスさん、これ、ゴブリンの角だ。ちゃんと依頼はこなしたぜ」

「どれどれ……よし、後は私がこれをフラットまで届けるよ。

報酬は明日になるよ」

「ふう〜、これで今日は仕事終わり！さあ、さっそく街へナンパ

に

「なにを言っているんですかあなたは。今日はこの後私と薬草の採集の依頼をする約束じゃないですか」

「あだだだだ！そういえばそうだった！わかったから髪を引く張るのはやめて！へんな場所にハゲが出来ちゃう！」

アホはシラヌイに引きずられながらギルドの外へと消えていった。アホがハゲていたら何となくハゲの部分を指差してやるう。

「おう！ヤマトおかえり！」

「おかえりなさいヤマトさん」

シラヌイ達と入れ代わるようにカイとキルマがギルドに戻ってきた。

「さつきクライスがシラヌイに引きずられてたけど、何かあったのかい？」

「まあ、ちよつとな」

「ま、おおかたいつもの痴話喧嘩だろうね」

「ふーん？あの二人ってそういう関係だったの？」

「否定はしてたけど………端から見ればそんな風にしか見えないねえ」

確かにそうだな。なんだかんだいって仲いいかもな、あの二人。

「ヤマト君は今日はもう休むのかい？」

「そうですね。他にすることもないですからね」

「そうかい。それじゃゆっくり休むといいよ」

「お休みなさい……」

俺は自分の部屋に戻ってゆっくりと眠る事にした。いやあ、昼間っから寝れるなんて幸せだ。

ちなみに夜、依頼を終えて戻ってきたアホの髪の毛が一部分抜けていたのはまた別の話。

第九話 不思議な夢のち勉強会開始（前書き）

これで投稿十話目です。これからも不定期な更新になると思いますがよろしくお願いします。

第九話 不思議な夢のち勉強会開始

……………目を覚ましたら見知らぬ場所にいた。

おかしいな。俺はさつきまで部屋で寝ていたはずだよな。なのになんで壁が石で出来ていて床に半径三メートルぐらいの魔法陣らしき物がかかっているだっ広い部屋で寝ているんだ？

ちよつと試しに頬をつねってみる。……………痛くない。よし

！ということは夢だなこれ！よかった。また知らん場所に召喚されたかと思った。夢ならなにが起こってもおかしくないからな！

「……………が……………」
俺が軽く安心していると近くから声が聞こえてきた。なんだ？

「……………な……………る……………」
声がした方を向いてみると頭から二本の角が生えたオッサンが椅子に座ってなにかぶ厚い本を読んでいた。どれ、ちよつと近づいてみるかねえ。

「あの一？すいませーん！」

「……………た……………」
いきなり無視された。てか近くでも声が全然聞き取れない。本の文字も読めねえし、俺の無意識よ、夢ならそれくらいサービスしてくれ。

俺が俺の無意識に文句を言っていると、オッサンは本を閉じて椅子に置いた。そして魔法陣の中心に立った。

「……………！……………」

オッサンは呪文のような言葉を発した（ように見えた）。するとオッサンの頭上の空間が裂けた。これって俺が吸い込まれたアレにそっくりだ。

「……………」

オッサンは裂け目に向かって手を突き出してなにかの言葉を発した。そして手から黒い球体状の塊が現れた。それをオッサンは裂け

目に向かって打ち出し……

「ヤーマトー！起きろー！」

「グハツ?!」

なにかがいきなり俺の体の上に乗っかってきた。

「ほらほら起きてよー！朝だよー！」

俺の体の上にいるのはリアその人だった。

「……………起きたからとりあえず俺の体からどいてくれ。起き上がれねえ」

「はいー！」

リアは元気よく返事をする。と体から降りた。

「よし、まずはいきなり俺の体に飛びかかってきた理由を聞かせてもらおうか」

「えつとねー、もし魔法でヤマトを起こしたら怒ると思ったから普通に起こしたんだよ」

こいつの中の普通の起こし方は相手の体に飛びかかる事を指すらしい。

「頼むから次からは声をかけるだけにしてくれ……………」
俺はリアを部屋の外に出して下に降りる準備をする。

とはいえ俺も完全に油断していた……………！昨日早起きを誓ったというのに！部屋の鍵はリアが魔法でドアごと壊したのでただいま修理中。なので俺の部屋に侵入するものを阻む壁はない。よって俺のプライバシー駄々漏れ。これでは部屋をちらかしたままに出来ないし、下手に十八歳未満は鑑賞禁止な本を隠すこともできない。

まあ考えても仕方ない。とりあえずさっさと着替えよう。

「はあ、文字の勉強ですか」
着替えを済ませて一階に降りた俺はウィリアスさんにこの世界の言葉を教えると言われた。

なんでもウィリアスさんはこのギルドのメンバーに教師のような事をやっているらしく、この世界の文字が分からないままでは不便だろうということとで約五十日ぶりにやることにしたらしい。

「ええ〜…………勉強なんてつまんないよ……」

そうだったのはリアだった。やっぱりこいつ勉強嫌いだったか。

「俺もだぜ……。女体の神秘についての勉強なら何時間でもゲフッ?！」

「あなたは知能レベルが魔物並なんですから少しは勉強したほうがいいですよ」

例の如くアホの首にシラヌイが手刀を決めた。痛そうだ。

「リアですよ。あなたはいまだに一桁の足し算すら危ういんですよ?！」

そこまで酷いのかコイツ?!

「だって…………勉強なんてやんなくても生きていけるし……………」

でた!おバカさんという台詞!

「ウエイトレスの依頼を受けて注文の数が指の数を超えるとその時点で頭がおかしくなったのはどこの誰だい?」

ウィリアスさんがジト目でリアを見る。やっぱりダメやん!

「まあ今日はリアとクライスの事もあって勉強ということだよ」
なるほどね。アホは知らんがリアはかなりやばいようだしな。

「さてと、それじゃ始めようか。ヤマト君にはカイとキルマが、リアには私が、クライスにはシラヌイが、それぞれ教えることにします」

俺はカイとキルマか。まあウィリアスさんが任せただからきつと大丈夫だろう。

「おつ、あたしの出番かい?」

「ヤマト君、よろしくね……………」

うお、カイが上目遣いを！男だとわかっていてもときめいてしま
う！

「さあ、あなたもやりますよ」

「ちよ、わかったから引つ張らないで！また髪を抜く気か！」

アホが引きずられながら二階へと姿を消した。やっぱり仲いいよ
な、あの二人。

「リアは特別に私がつちりと教えてあげます。覚悟してくださいさ
い」

「いーやーだー！ヤマトー！カイちゃん！キルマー！たーすー
けーてー……………」

リアもウィリアスさんに二階へ連行されていった。終わる頃には
真っ白になっていそうだ。

さてと……………俺も張り切ってお勉強といきますか！

第十話 勉強会終了のち燃え尽きた者達

「ゼエ……ハア……ゼエ……ハア……」
文字の勉強を始めてから大体二時間。俺はすでに虫の息といったもしい状態になっていた。

……俺だつて元は今時の学生だつたんだ！始める前はやる気に満ちていたさ！なのにいざやりはじめると体と脳が拒否反応を起す。ようするに勉強アレルギー体質なんじゃー！

「しっかしヤマト、あんたは覚えるのが早いねえ」
ちなみに今は元の世界で小四ぐらいに当たる文字を勉強していた。二時間でここまで頑張った自分を褒めてやりたい。

「ヤマト君、大丈夫……？少し休憩する……？」
カイが俺の顔を覗き込みながら聞いてくる。カイを女だつて思っている奴が俺と同じ体験をしたら絶対にドキツとくるよコレ。

「あ、ああ。そうするよ。」
さすがにそろそろ休まないと体と頭がもたん。とりあえず一息いれよう。

「はい……ヤマト君。どうぞ……」
カイが俺の目の前に煎れたての紅茶を置いてくれた。その心遣いに身も心も暖かくなりました。嗚呼、幸せ……。

「どうしたんだい。そんな緩みきつた顔をして？」
「ハツ?!」

いかんいかん！カイは男なんだ、俺にはそういう気はないんだ！
「い、いやなんでもない」
よし、気を入れなおそう。がんばって文字を覚えなさい！

「そういえば、ヤマトは異世界から来たんだよね。ヤマトの世界にも学校はあるのかい？」

「ああ、そうだけど。俺の世界じゃ子供のうちから学校に通うのが普通なんだ。それがどうかしたのか？」

いきなりそんな質問をしてきたキルマに俺は正直に答える。なんでそんなことを聞くんだ？

「へえ…そうかい…。なんか羨ましいねえ」

「羨ましい？」

「ああ。この世界じゃ、勉強したくても出来ない連中がほとんどだからね。だからガキのうちから学ぶことができるってのは恵まれてるってことさ」

なるほど、確かに俺の世界にもそんな子供達がいるのは知っているが、この世界だとそれが普通なんだな。

「まあ、中には例外もいるけどね」

キルマのその台詞に俺は引きずられていったアホ二名を思い出した。多分今頃真っ白になっているかもしれない。

「っと、それじゃそろそろ再開するか」

「うん…そうだね…」

たった数分だがまあとりあえずは休めたからいいか。さてと、頑張りますかね！

「うう……………なんだか一生分の気力を使いきった気分だ……………」

何回か休憩をはさみながら勉強をし、日が暮れる頃にはこの勉強会は終わりを告げた。とりあえずこれで普通に暮らしていくぶんには困らないぐらいには文字を覚えた。我ながら頑張った自分を褒めてやりたい。

「ああ……………すうじが……………すうじがくるよう……………」

「リア、もう勉強は終わりましたよ」

「クライス、今日学んだ事は？」

「ジヨセイニムヤミニコエヲカケナイ、バカナコトハシナイ、しらぬいサマノイウコトハゼツタイデス……………」

上で勉強していた面々が一階に降りてきた。でも約二名なんかお

かしくなってる。リアは幻覚が見えてるし、アホに至ってはあれもう勉強じゃなくて洗脳じゃないのか？ウイリアスさんとシラヌイがなにをしたのが気になる（特にシラヌイ）。

「ヤマト君、どうだい、進み具合は？」

「なんとか、基本的な言葉は覚えましたよ……」

「ウイリアスとシラヌイのほうはどうだい？」

「リアは手を使ってなら一桁の足し算・引き算は出来るようになったよ」

おそらくは相当ハードだったんだろうが、それでもその辺りがやつとだとは……。

「クライスには私が厳しく人としてのルールやマナーを教えました」

「厳しく」ねえ……。まあ、深く突っ込まないほうが良さそう

だ。
「ねえねえ、はやくご飯食べよう！もうべんきょうのしすぎで頭がつかれたよ」

「おっと、そうだね。それじゃ今日はあたしが作るよ」

「そうだね。今日はクライスが当番だったけど……」 「ハイ、ナンデシヨウカういりあすサン」

「……まあ、こんな状態になっているからカイに作ってもらいたいんだが……お願いできるかい？」

「はい！頑張って作ります！」

料理を頼まれたカイは顔を輝かせて近くの扉に入っていった。まあ、今のアホに料理をやらせるのは不安なんだろう。てかシラヌイは本当に何をしたんだ。

「それじゃあ、料理が出来上がるのをみんなで待っていきましょうか」

そうして待つこと数十分、カイの料理がテーブルの上に運ばれてきた。

おお！なんかいろいろきた！縦長のパンの間に肉やらキャベツや

らをはさんだハンバーガーみたいなやつとか大きな魚を焼いて周りにいろいろと盛りつけたものとか、まあとにかくうまそうだ。俺、こういうのが好きなんだよな。

「ハッ！ご飯！ご飯！」

料理が運ばれてきた途端にリアは元気を取り戻した。そんなに辛かったのか。

「それじゃみんな」

ウイリアスさんがみんなに声をかける。

「せえゝの！」

「『『』いただきます！』『』」

リアのかけ声でみんなで食事前の挨拶をした。まっ、みんなで食べる飯もいいもんだな。

第十一話 絶叫マシンの何倍もスリル満点だったぜ…（前書き）

更新に一ヶ月以上間があいてしまい申し訳ありません。
これからはちよくちよく書いていくつもりです。

第十一話 絶叫マシンの何倍もスリル満点だったぜ…

「はあ？屋敷の調査？」

気力体力を根こそぎ吸い取られたかのような地獄の勉強会から数日後（アホは一晚寝たら元に帰ってシラヌイにコブラツイストを決められていた）。リアと一緒に依頼をしようと言ってきた。

詳しく説明すると内容はこの街から馬車で約二日程で行ける距離の街の外れにあるという無人のはずの屋敷から物音がするので調査してほしいということらしい。

「うん！面白そうだと思わない？」

そう答えるのは我がギルド・氷狼の爪フエンリルククロウきつてのトラブルメーカー、リアだ。背中まで伸びた色素が薄いストレートヘアーや同じ様に白い肌、深紅の瞳はじつと見ていると吸い込まれそうだ。体つきも年頃の少女らしくそれなりに出ていたり引っ込んでいたりなど、まあ要約すると美少女なのだか恋愛対象として見れないのは体と比べ成長がかなり遅れている子供並の精神のせいだろうか。

それにしても…こいつが屋敷の調査ねえ……。こいつが絡むと最終的に屋敷が崩壊してしまう凶しか思い浮かばないのはなぜだろう。

「ねーねー、ヤマトも一緒にやるーよー！きつと楽しいよー！」

「断る。お前が何かやらかしそうで気が気じゃない」

「私別に何もしないよ！絶対になにもしないって言い切れるよ！」

「いやーリア、お前は絶対に面倒を起こす！お前とは出会ってまだ日は浅いがそれだけは断言出来るくらいには俺はお前のキャラを掴んだと言い切れる！」

「どうして私がそんな風に思われてるのよー！」

「人を起こしに来たと言つて魔法をぶつ放すような奴をそんな風に思つてなにが悪い！」

「まあまあ、二人ともそのくらいに」

リアとギヤーギヤー言い合っていると俺達の口論に割って入ってきた人物がいた。氷狼の爪のリーダーであるウイリアスさんだ。

彼はそこらのアイドルが裸足で逃げ出す程整った顔立ちをしている。キリツとした銀色の目、筋の通った鼻などが絶妙な配置で置かれている。さらには外見と同様成熟した大人な精神も相まってかなりのイケメンだ。こんな顔で笑顔を向けられたら大抵の女性は恋に落ちるであろう。噂ではこの街にはウイリアスさんの非公式のファンクラブが存在しているらしい。同じ男としてはものすごく羨ましい。

「ヤマト君の言っている事は理解できるが「どうしてよ?!」屋敷の調査にはヤマト君にも一緒に行ってもらおうよ」

ウイリアスさんが隣で騒ぐリアを軽くスルーしながら俺の中の厄介事のフラグを立ててくれてしまった。

「ヤマト君、そんな泣きそうな顔をしなくても大丈夫だよ。クライスとシラヌイとカイにも一緒に行ってもらおうから」

マジでか！アホがくるのがまた不安だったがまあアホはシラヌイが抑えてくれるだろう。カイにはリアの暴走を抑えるのを手伝ってもらおう。

「よし！リアちゃん、なにがあっても俺が守ってみせるからね」

そう言ったのは脳内の九割以上が女の事で埋まっていると思われ、軟派野郎代表のような男クライスだ。ウイリアスさん程ではないが金髪碧眼、浅黒い肌、しまった体などは黙っていれば二枚目に見えるもなくもないが口を開けば性欲丸出しな台詞ばかり吐き出すので女性人気はウイリアスさんの足元にも及ばない。アホと呼ぶに相応しい。

「クライス、私達の事を忘れていませんか？」

そうクライスをジト目で睨みつけたのは身長百五十センチにも満たない小柄な少女、シラヌイだ。肩まで伸びた茶色がかつた黒髪を後ろで縛り、常に半分閉じている目や滅多に変わらないその表情、その雰囲気からクールな印象が見て取れるが、クライスが絡むと結

構感情があらわになるとここ数日でそんなふうになるように思ってしまった
不肖・日下部 大和十七歳。

「わ、忘れてないから地味に強い力で足を何度も踏みつけるのはやめて！」

「ヤマト君…よろしくね…」

そう俺に笑いかけてくる美少女、じゃなかった。女の子にしか見えない容姿をした少年（にみえるだけで俺より二つも歳が上らしい）カイ。身長はシラヌイよりも少し高い程度。首の辺りまで綺麗に切り揃えられた明るい緑色の髪、くりつとした大きな緑色の瞳、小さな唇、ほっそりとした手足、小動物を思わせる動きなどその全てが庇護欲を掻き立ててくれる。カイのことを初めて見た人間は間違いなく彼を女の子だと思ってしまう。かく言う俺もその一人だった。

「リア、移動手段はどうするんですか？」

「それなら大丈夫！ウイリアスがなんとかしてくれるから！」
人任せかよ。

「そういうと思って馬車の用意はしてあるよ」

「……」

ウイリアスさんの台詞を聞いた瞬間、リア以外の三人が苦虫をかみつぶしたような顔をした。

「あれ？三人ともどうしたんだよ」

「いや……。……ウイリアスさん、まさかまたあの人が……」

「ああ、そうだよ」

その言葉を聞いた瞬間、アホがなぜか目眩でも起こしたかのよう
にフラフラと始めた。本当にどうしたっていうんだ？

「なあシラヌイ。あの人が誰の事なんだ？」

俺は気になってシラヌイに聞いてみた。するとシラヌイはなにかを諦めたような表情で俺の質問に応じた。

「………すぐに分かると思います」

？いまいち分からないが話の流れから察するに俺達が移動に使う馬車の騎手の人の事らしいな。

「……………あの人はいつ…くるんですか…？」

「もうすぐ来ると思うよ」

「……………」

おお、まるで死刑が決まった囚人のようだ。

そんな事を考えていると外からゴロゴロとなにかが転がる音が聞こえてきた。

「おや。来たようだよ」

「ああ…来てしまったのか…。……………断罪の時が」

ガツクリと膝を落として顔が絶望の表情に歪むアホ。んなおおげさな。

「仕方ありません。…これも修業の内と思えば…」

修業で。ただ馬車に乗るだけじゃねえか。

「ほらみんなー、早く早くー！置いて行っちゃうよー！」

扉の前ではしゃぐリア。遠足前日の小学生かこいつは。

「ヤマト…、遺書を書くなら今のうちだ」

「クライスの言うとおりです。後からでは取り返しがつきませんよ

…」

本当にどうしたっていうんだ。

まあいいや、俺もさっさと支度を済ませないとな。

準備を終えて外に出ると二頭の馬に引かれた車が置いてあった。

「…やあ皆さん、約二十日ぶりですね」

馬車を眺めていると後ろの方から突然声をかけられた。

「ラードさん！久しぶりー！」

「ラ、ラードさん…」

「やはりラードさんでしたか…」

「二人とも…きっと大丈夫だよ…。きっと…」

本当にどうしたんだこの三人は。

けをとらない速度で進んでいく。ちょ、なにこれヤバいつて！絶対に事故る！

「アハハハハ！すごいすごい！」

「ギャアアアアア？！?!」

「父様母様、先立つ不幸をお許しください……」

「怖い…怖いよう……」

この状況で正気を保っているのはリアだけ。いや、これはただ興奮してるだけだ！つてうおおおお？！今明らかにUターンしたぞ？！よく倒れなかったな！今度はジグザグ走行かよ！うっ…気持ち悪…。…ギャツ？！今なんか体が浮いたような感覚が！もしかして今飛ばなかった？！

ーその後街に着くまでの二日間、俺は吐き気と戦いながら必死に般若心行を唱えつつ何度も走馬灯を見ながら馬車の旅を楽しむむハメになった。

第十一話 絶叫マシンの何倍もスリル満点だったぜ…（後書き）

感想、意見等ありましたらぜひよろしく願います。

第十二話 腹の中がスクランブルしてやがるぜ…

「オエエエエエエ！」

この拷問と言えるぐらい酷い暴走を静かに早く終われと願いつづける事まる一日。俺達は遂に目的の屋敷がある街にたどり着いた。

俺とアホは馬車が門の前で一時停止すると我先にとばかりに降りていった。そして近くの木を支えにして腹の中に封印されていたブツを大地に解き放っていた。

「ふ、二人とも情けないですね…このぐらいで嘔吐するとウブツ…」

「ゼエ…そういうお前こそ今にも…ハア…吐きそうじゃあああ頭を揺らすな！うっやべまたオエエエエエ！」

「もーみんなだらしがないな！」

全然なんともなさそうにいったリア。

「そういう…お前こそなんでウツ…ハアハア…平気なんだよ」

「だって楽しかったんだもん」

あれを楽しいと言い切るか。俺は途中から考える事をやめていたんだが。

「皆さん、これで私の仕事は終わりですが…よければ帰りも私が…さらりと地獄への片道切符を渡そうとしてきたラードさん。」

「いやいや大丈夫！」

「ええ！私達帰りはのんびりと歩いて行きたい気分なんです！」

「それにラードさんにも他に仕事があるんじゃないんですか?! ああそうなんだあるんだそれじゃ仕方ないな俺達は俺達で帰るんで、じゃっ！」

俺とアホとシラヌイはコンマ一秒で互いの考えを理解し、強引にラードさんの厚意を断った。

その後の事はとにかく早かった。自身の限界を超える速さで馬車の中で放心状態のカイと文句を垂れまくるリアを連れて街の中へと入って行った（門を通るとき門番の人が三メートルくらい間をあけ

ていたのが軽くハートにヒットした)。

「あー…まだ気持ちわりい…なんだか世界が揺れているような…」

「今は美少女の唇以外なにも味わいたくゲブツ！」

「その状態で…よくそんな…脳にウジが沸いたとしか思えないような台詞が…出てきます…ね」

この二人はこんな状態でもようやるわ。ほんまに仲ええどすな。ちなみに今俺達はこの街の宿屋で部屋二つを借りて休んでいた。

「ねえ…皆はこのあとどうする…?」

「まずは休もウツ…」

あ、あぶない…またモザイク処理确实の汚い絵を晒すところだった…。

「お、俺もヤマトに賛成…」

「こんな状態では…まともに動ける気がしません…」

二人とも俺の意見に賛成の様子。だがこの場で一人だけ文句タラタラなお方がいらっしやった。

「ねーねー、早く町を見てまわるーよー！」

「いくなら一人でいけ…。俺達はここで休む」

「私だけじゃつまんないよー」

「今お前にあちこち引きずり回されたらまた腹の中の物を引きずり出してしまっハメになる」

「ぶー、ならいいもん。一人でいってくるから！」

そう言い大声で切るとリアはドカドカと足音をたてながら走っていった。

よし、なんであいつはあんなに無駄に元気なんだ…。まあ、それはそれとしてあいつがいない今のうちにしっかりと休まないと。

第十三話 ああ、なぜだろう。震えが止まらないぜ

まず最初にこれだけいつておこう。俺は自分の目で見た物しか信じないタイプだ。

異世界だとか魔法だとかも実際に目にするまで信じてなかった。だがそれは、言い方を変えれば自分の身に起きた事件などもしつかりと受け止められるということ何じゃないかと俺は思う。

なぜいきなりこんなことをグダグダと垂れたかというところ、現在の俺の置かれている状況にある。

「うづ…暗い…なんか出たりしないよな…」

わかりやすく言うと俺は岩壁に囲まれた暗い洞窟らしき場所です迷っている。後今の台詞はこんな暗い所で魔物なんかに出くわしたりしたら面倒そうだからという意味だ。けっしてお化けが怖いとかじゃ

ピチヨン

「ウギヤアアア?!」

く、首筋のあたりに冷たい何かが！ナニカガ！

「…なな、なんだよ…水滴が落ちただけかよ…」

落ち着いて確認してみたら首筋が濡れていた。H A H A H A 驚かせやがって、ちよつとビビッ……ビツクリしたじゃねえか。…

…。

「…ていうか、なんで俺がこんな目にあわなきゃならないんだ…」

そうだ、そもそもなんでこんな状況になってしまったんだ。

こんな時こそ落ち着いて過去（1時間くらい前）を振り返ってみよう。そうすれば打開策が見つかるはずだ！うん、そうだ！そうしよう！断じて現実逃避をする訳じゃないからな！

あの後日が暮れるまで眠りつづけた俺は体調がすっかり回復した。
もうあんな地獄の刑罰のような馬車の旅はゴメンだ…。

俺が起きたすぐ後にリアも帰ってきたので俺達は依頼にある屋敷
に向かうことにした。

だがその依頼で少し気になることがある。

「おいアホ」

「誰がアホだツリ目」

「なんだ、今ので返事をするってことは自分はアホだっていう自覚
があるって事じゃないか。よってお前はアホだ」

「ふざけんな！ケンカ売ってるのか！」

「ところで屋敷の調査の話なんだけど」

「さらつと流した！」

アホがなにか言っているが気にしない。

「依頼書にかかれていた条件が気になってよ」

依頼にはたまに依頼人がなんらかの条件をつけてくることがある。
例えば人数を指定したり特定の技能（魔法など）を持っていないと
ダメだとかそういうったものだ。

ちなみにこの依頼の条件は「必ず夜に来ること」だ。

「なんで夜じゃないとダメなんだ？」

「知らね。よ。依頼人に聞きゃあいいだろ」

「やっぱり暗いとなにかがでそうでワクワクするからじゃないから
かなー？」

そう思うのはお前だけだ。

「さてよ？もしかしたら依頼人はこの俺様の隠しきれない魅力を魔
法で見て、俺とあんなことやこんなことがしたいから鼻にユビがあ
ああああー！」

「それは絶対にありえません。……あまり考えたくないですが本当は何らかの事件の痕跡を秘密裏に処理するといった内容なのでは……」

「もしそうだとしたら、俺十七歳で犯罪の片棒をかついでしまうことになるんじゃない……」

「……とにかくまずは依頼人に会って詳しい話を聞こう……」

「それが一番ですね。早くいきましよう」

シラヌイはそういうとアホを引きずりながらスタスタと歩いていった。

アホの目が何かを訴えていたような気がするが俺はしっかりと目を逸らしてやった。

「へえ……、これがこれから調査することになる屋敷か……」

俺達は今、目的の屋敷の前にいた。人通りの多い所から離れてぽつんと建っていたので割と早く見つける事ができた。

「しっかしこれは……なんだか妙な感じがするな……」

「うん……。多分いると思うよ……」

アホとカイが変な事を言い出す。俺は平静を装って聞いてみた。

「いいいいいるってにやにがだ？」

「ヤマトさん、なぜそんなに体が小刻みに震えているんですか？」

「いや、今日はなんだか冷えるなーA H A H Aー」

「……」

皆の俺を見る目がなんだか疑念に満ちているような気がする。

「……なあヤマト、さつきから気になってたんだけどよお」

「な、なんだよ」

「さつきからお前の後ろにいる髪の毛の長い血まみれの女性は」

「キヤアアアアアアアアアアゴフツ?!?!」

気が付いたら体が勝手に屋敷とは反対方向に全速力で走り出して

近くの木に激突していた。

「…何お前？まさかお化けとか怖いのか？」

「ばばば馬鹿いうな。この俺に限ってそんなはずないだろ」

「女みたいな悲鳴を上げながらダツシユした奴が言える台詞じゃないな」

「何言つてんだ！今のは大声で発声練習しながら走り込みをしただけだ！」

なんで俺がビビりだなんて思ったんだ、まったく！

「つまり自分はいくまでもビビってはいないと言っただな？」

「当然だ！」

「ならさつさとあの屋敷の中に入ろうぜ」

「にやんでだよ！」

「いや、そういう依頼だろーが。お前は何をしに来たんだよ…」

ぐう…！アホに正論を言われるとは、なんたる屈辱！

「じゃあヤマト、お前が先頭な。お化けなんか恐れない勇気を持っているって言うんなら当然大丈夫だよなあ？」

「あああたりまえじゃ！」

「ならさつさといこうぜ、なあ皆」

アホの言葉に頷く三人。…ふっ、いいだろう。この俺の肝の座りっぷりを見せてやるうじゃないか！

そして扉の前に俺を先頭に並んで立つ俺達。

「……………」

「どうしたのヤマトー？」

「なにやってんだよ。早く開けるって」

「わかっちよるわ！」

くっ、何を震えているんだ俺の右手！お前はそんな奴じゃないはずだろ！

とりあえず気持ちを落ち着かせるために深呼吸だ…。……………よし、

もう大丈夫！

「じゃあ開けるぞ…」

「早くしろって」

俺はゆっくりと扉を開けながら中を確認する。

「……………何もいないみたいだな」

そのまま扉を全開にして屋敷の中に侵入する俺達。

「中は意外と綺麗ですね」

確かにシラヌイの言う通りだ。無人だっというから荒れ放題だと思っていたんだがホコリとか全然たつてないし…、誰かがこっそりきて掃除してんのかな？

「そうだな…これならきつと下着とかもきつと清潔な状態で」

「もし下着を盗むなんて真似をすればその下着があなたの血で汚れることになりますよ？」

「寝ぼけた事言ってますませんした！」

土下座してシラヌイに謝るアホ。あいつこそ何をしに来たんだよ。

「ねーねー、はやく探検しよーよー」

「探検じゃなくて調査な」

こいつに至っては完全に遠足気分だ。

「ねえ皆…、とりあえず手分けして探さない…？」

「そうですね。私とクライスが二階に行きます」

「なんでお前と…」

そこまで言ったアホはシラヌイの顔を見るとまるで首根っこを掴まれた猫のように大人しくなって連れていかれた。アホはいったい何を見たんだろうか。

「それじゃあ俺達も……………ってあれ？リアは?!」

周りを見渡して見るとリアの姿は無かった。あいつはどこにいきやがった?!

「リアちゃんは僕が探すから…、ヤマト君は先に調査してくれろ…?」

ぐあっ！上目遣いをお願いだど?!もう男だと分かっているても胸の鼓動が早くなってしまっ!

「ああ、任せておけ。俺が隅から隅まで調べて置いてやるぜ！」

できる限りカツコイイ表情をつくりながらカイにそういった。

「うん…、それじゃあヤマト君も気をつけてね…」

カイは屋敷の奥へとリアを探しにいった。さてと、一人になってしまった。

「よよよよし、おお俺も調べるとちゆるか」

ちよつと噛んでしまった。建物の中だっというのに外より寒く感じるなー、さつきから体の震えが止まらないぜ。

「…じゃあこの部屋から調べるか…」

俺は適当に目についた部屋に入ることにした。どうか何もありませんように…！

キィ…という音を立てながら開いていくドア。中を確認してみると大量の本が置いてあった。

「すごい量だな…。ちよつと調べてみるか…」

もしかしたら隠し部屋への入口が隠されたりしているかもしれない。そう思つて本を手に取りうつとしたとき、

「ねえ…ヤマト…」

ふと後ろから声がした。この声は…リアか。俺は振り向かずに対応した。

「なんだリア。探検してたんじゃないか？」

声のトーンがいつもより低い。なにかあったのか？

「ちよつと…こつち…見てくれない…？」

どうしたんだ一体？なんか悪いもんにでも当たったのか？

「ねえ…ヤマト…」

まったく何があつたんだよ…。

仕方ないので振り返りながらリアに尋ねる事にする。

「リア、お前本当にどうし」

いつの間にかリアが鼻の頭が当たるぐらい近くに來ていた。

だけど今のリアはいつもと違っていた。不気味なくらい静かに俯いている。そしてこう言った。

「ワタシ キレ イイイイイイイ?！」

「ーそう、ただれた顔についている大きな口を吊り上げながら。

「ドウシタ ノ? ヤ マ ト?」

「…………… ギイイイヤアアアアアアアアアアアアアアアア?!!?!!?」

「俺の全身は恐怖に支配され、ただ叫び声を上げつつ上げる事しか出来なかった。」

第十三話 ああ、なぜだろう。震えが止まらないぜ（後書き）

感想、意見等ありましたらよろしくお願いします。

第十四話 俺のターン！…てたったこれだけ?! (前書き)

サブタイトルはそんなに気にしなくても大丈夫です。

第十四話 俺のターン！…てたったこれだけ？！

俺の名はクライス。ギルド「フェンリルクロウ」の一員だ。今日は屋敷の調査の依頼を受けてきている。くそ、予定なら今頃リアちゃんといいムードになっているはずなのに！何故だ！

「ほら、クライス。今度はその部屋ですよ。後何が変な妄想をしていませんか？」

「してねえし、いい加減俺を引きずるのはやめてくれないか？」

俺を引きずるのは俺と同じギルドに所属するシラヌイ。この（子供っぽいけど）可愛らしい姿の内側に邪神を飼っているのをつい先ほど俺は見た。

「たくつ…。なんでお前は俺に対してだとそんなにキツいんだ？そんなんじや嫁の貰い手がないぞー」

「結構です。私には必要ありません」

「なんだよ、そんな人生寂しいぞー」

「人生は常に修業です。そのようなことに気を取られている暇は私にはありません」

「じゃあよー、花嫁修業とかはどうだ？これだつて己を磨く立派な修業の一つだ！」

「そ、それは私の言った修業とはちがいます！大体私の事を欲しがるような物好きな人がいるはずありません！」

「そうかあゝ？あと数年もしたら……………まあ特殊な趣味のグオオオオオオ！！首に決まってゴプツ」

「フォローを入れるなら最後までしなさい！」

「ヤ、ヤバイ…首が締まって酸素が……………！！

「まったく…」

一分くらいで解放された。あつぶねー、危うく三途の川を渡ってしまう所だった……………。

「…ところで、一つ聞きたいのですが」

「な、なんだよ。流石に今すぐ胸を大きくする方法なんてアウチツ！」

本気で蹴られた。酷い！酷すぎる！

「違います！あなたとカイがこの屋敷に入る前に言っていたことです！」

「あ、ああ。それか」

それならそうと最初から言っただけでほしい。まあ俺も責任を感じないわけではないが。

「この屋敷にはやはり死霊の類の魔物がいるんですか？」

「そうだな。俺はカイほど魔力が強くないから、はつきりと感じる訳じゃないがな」

ヤマトはやたらとビビっていたな。あいつのいた世界じゃ知らないがこの世界じゃ死んだ奴の魂が魔物化することがあるからな。

「ゾンビならまだしも、ゴーストのように実体の無い魔物相手では魔法が苦手な私では対処に困ります。その時は頼みましたよ」

ゾンビは死体が、ゴーストは魂が魔物化したものだ。ゾンビなら物理攻撃が通用する分まだマシだが、ゴーストは完全に素通りしちまうから厄介だ。

「まあ俺もある程度なら法術が使えるしな」

「死霊系の魔物は法術でないと完全に倒せませんからね」

そう、奴らは人間が使える法術を用いなければ倒す事が出来ない。確か、未練を残した者を浄化するためだとか何とか。それ以外の方法で倒したとしても時間がたてば復活してしまう。俺も美少女に求められれば何回でも（性的な意味でも）復活できる！そういう意味では俺も奴らと変わらないかもしれない。

「……………今、猛烈にあなたを殴らなければいけない気がしたんです」

声にだしていたら壁と熱烈なキスをかわすハメになっていたようだ。

「ほら、早く調べますよ」

「はいはい……」

シラヌイに促されとりあえず本棚やダンスの辺りを中心に調べて見ることにした（別に変な物を探している訳ではない）。

えーと？降霊術大全、魔法のススメ、簡単！魔法道具作成マニユアル etc…。

なんだよ、魔法関係の本しか置いてねえじゃん！エロ本の一冊くらい置いておけよ！

「クライス、このダンスを動かすので手伝ってください」

「あいよー。よっこいせっ！」

二人でダンスを動かしてみる。ダンスの裏側にはホコリやゴミ等は全然なかった。ホントどうなってんだ？

「なにかありますか？」

「えーつと……お？」

見てみると下の方になにかのボタンがあった。

「なんだこのボタン？」

いかにもな感じの雰囲気……。……………。

「わかりません。なので今はむやみに触らないで」「ポチッ」何を押ししているんですかあなたは！

「はっ?!しまった、つい！」

このボタンを見ているとなぜか無性に押したい衝動が！げに恐ろしきは人の性ということか……。

「……………あり？」

これから襲い来るであろう何かとシラヌイから身を守ろうと身構えた。だが俺の予想に反してなにも起こらなかった（シラヌイは俺のすねを蹴ってきたが）。

「なにも起こりませんね……。どういう事でしょうか」

「お前が事あることに暴力を振るってくるのもどろろいう事なんだろうか」

それはともかくとして、何故なにも起こらないんだ？

「壊れてたとか？」

「そう…かもしれませんね」

「まったく、驚かせやがって…。…………でもこれは何の仕掛けだったんだ？」

「…………まっ、気にしててもしょうがないか」

「そうですね。早く他の所も調べましょう」

「シラヌイの言う通りだな。さっさと仕事を済ませるか。」

「そついやリアちゃん達は今どこにいるんだ？大丈夫かな…」

「ハアツ…ハアツ…なんとか撒いたみたいだな…」

「リア（のような何か）から逃げることに数分。俺はバツチリ迷子になっていた。まあ無我夢中で走ってたからな…」

「…にしても…なんなんだよアレ?!本当にリアなのか?!」

「どうなってやがるんだ一体…。訳がわからない。」

「考えても仕方ない…。一旦戻……………るのか？俺一人で?!」

「またあのリアもどきに出くわしたりしたらどうしよう。てかそれ以前に一人で入口まで行けるのか俺？」

「…考えても仕方ない！行動あるのみだ！」

「とまあ、こんな感じに俺が覚悟を決めた矢先に、」

ヒタ… ヒタ… ヒタ…

「?!」

「思わず背筋が跳ね上がった。こ、これはもしかしなくても…」

「ヤマト マッテヨ」

「やっぱりかよ！どどどどどっししよう?!ここは逃げるべきか?いや、それだとダメな気がする。相手がゾンビっぽいのが不安だが、ここは戦っしか…」

「ヤマトオオオオオオオ」

その時俺は人間の限界を超えたと言っても過言ではないほどの早さでその場から駆け出していた。あんなんと誰が戦えるかバカヤロ
ー！

「と、とにかく早く皆と合流しないと！」

全速力でリアもどきから逃げ回る俺。だが、

「おいおい、なんでこういうときに限って行き止まりに来ちまうんだ俺？」

あっけなく追い込まれてしまった。奴はもう十メートルくらいの所まで近付いてきた。

「ヤマト」

ヤバイ！このままじゃ俺もリビングデットの仲間入りを果たしちまうのか?! イヤアアアアアア！名無阿弥陀仏名無阿弥陀仏名無阿弥
弥…

と俺が心の念仏を唱えはじめた辺りでそれは突然起こった。

「炎よ我が手に集え！ファイアーボール！」

聞き慣れた声があった瞬間、奴は燃えながら俺の足元の辺りまで吹っ飛んできた。

「でええええ?! 今度はなんだ?!」

このリアもどきはもがき苦しむような動きをした後、跡形もなく消え去った。

「ヤマトーだいじょーぶ？」

「……………へ？」

声があった方を向いてみるとそこにいたのはリアだった。

「リ、リア！なんで? どうして?!」

「ヤマトがすごいスピードで走っていくのを見たから！」

そして追いかけて来たのか。まあ何にせよ助かった。

気が抜けて俺は床にへたりこんだ。なんかすごい疲れた…。

「ねえ、ヤマトは何をしてたのー?」

「え? あ、ああ俺は…」

そこまで言った瞬間、

第十五話　ちよつとずつ真相に……近付いてんのか？（前書き）

また勝手に一ヶ月も更新ストップしてすみません…。

第十五話　　ちよつとずつ真相に……近付いてんのか？

「うう…なんでこんな目にあわなきゃならないんだ…」

突然暗闇の中に放り出され、十数メートル程落下すると運よく池らしき所に落ちた（かなり水が汚れていたが）。おかげで体にはとくに怪我はない。不幸中の幸いといった所か。

「にしてもなんであんな所に落とし穴が…」

あんな所に作る必要性あるのか？てかなんで開いたんだ？どつかのアホが落とし穴のスイッチとかを操作したのだろうか？だが今考えた所で分かるはずがないか。それよりもさっさとここから脱出して皆と合流しよう。

「…それにしても暗いな。こんな時魔法が使えれば……ん？………
…つて、ああ！」

そうじゃん、俺魔法使えるんじゃない！すっかり忘れてた！

「何か燃えそうな物はないかな？」

手探りで近くになにかないか探してみる。………お、木の棒っぽいのが、ちよつと勿体ないが後は俺のワイシャツを先の方に巻き付けて…。雑だけどとりあえずこれでいいか。

俺は右手に装着した赤いナツクルを突き出す。そして魔法発動のキーを唱えた。

「「フレア」！」

ナツクルから炎が放射されあたりを明るく照らす。俺はその炎が消えてしまわない内に木の棒の先端に上手く火をつける。

「おっ、ついた。よかった！失敗したらどうしようかと思った」

これで簡単な松明が出来た。けどそんなに長くは持たないだろうから早いとこ出口を見つけないと…。

「全然出口がみつからねえ…。てか余計に迷っているような…」

数十分ぐらい歩き回ってみたが出口の出の字もない。俺の方向音痴はこんな時でも頑張ってる働いているようだ。こんな時くらいサボってたっていいのに。

「これ以上探し回っても深みにはまるだけっぽいしな…」
さてどうするか…と考え始めた時、

バタバタバタバタ…

「?!?!?!」

足音の大群が聞こえるのがわかった。なななんだ今の?!

しかもよく聞いてみると足音はこっちに近付いている。これってマズイかも!

「は、早く隠れないと!」

慌てて周りを見渡してみるが身を隠せそうな所はない。

「くそ!こうなったら来た道を戻るしか……………」

そこまで言っただけ振り返ろうとした所で背後に何かの気配を感じた。もう何が待ち受けているか分かつちゃうよ、僕。

恐る恐る振り返ってみるとそこには、

「……………ウオオオオオオオン……………」

半透明のぼんやりとした不気味な球体状の奴らがいた。

「……………さよ〜なら〜」

そんな気の抜けた台詞を言いながら逃げ出した。きっと捕まったら大変な事になるからな!

「ぬおおおおお?!なんか追いかけてくる!」

頭だけ後ろを向けてみると幽霊らしき奴らは明らかに俺を狙っている。俺なんか食べても美味しくなんかないから!一週間は腹壊した状態になるから!

しかしこのまま逃げつづけても絶対に追いつかれてしまうだろう。こうなったら…。

「何か言いましたか？」

「いえ何も」

「でも本当にどこにいたんだろーねー？」

確かに、この屋敷には何かがある。リアちゃんが見たというゾンビもだが、なにかとんでもないものがここにはあるんじゃないか…。

「なあシラヌイ。なにか罠のスイッチとかはありそうか？お前ならそういう卑怯で汚い事に詳しいからゴボエツ?!」

「もう少しマシな言い方は出来ないんですか！」

いきなり正拳突きを喰らった。血も涙もねえんだけどコイツ！

「とりあえず通路にはそれらしいものはありません。あつたらクライスでとつくに試しています」

「なあ。人権って言葉知ってる？」

シラヌイの中の俺ってその辺に落ちてる石ころと同じような認識なんだろうか？

「ねえ…。次はあの部屋を調べない…?」

俺がシラヌイに一方的な暴力（俺は絶対に何も悪くない）を振るわれているとカイが数メートル先にある扉を指差して聞いてきた。

「よーし！それじゃあとつげきー！」

そう言つと同時にリアちゃんは走り出して行ってしまった。ああ、そんなリアちゃんもなかなか可愛い。

「うおっ、本だらけじゃねえか…」

「それでは手分けして探しましょう。何か怪しい物があったらすぐに教えてください」

ざっと回りを確認してみたがこの部屋はどうやら書斎らしい。正直いって俺は子供が見てはいけない類いのブツにしか興味はないがな！

「どうしたんですか、クライス？」

「いやなんでもない」

さてと、俺も探しますか。なんか近くにいるロリ少女が指と指の間にナイフを挟んでいつでもこっちに投げる準備をしてるしな。

「…しつかしそんな都合よく隠し通路への入口とか、見つかる訳ねえよな」

「きつとどこかにはあるはずだよ…。頑張って探そうよ…」

「けどなあ…この屋敷結構広いし、地道に探してたら日が暮れる…
つてか昇つちまうぞ」

「それでも探すしかありません。………とはいえ何の手がかりもなしに探索を続けてもただ時間を浪費するだけ…何か手がかりになりそうな物は…」

屋敷の設計図見たいなもんがあれば解決なんだけどなあ…。

「ねーねー、こんなのがあつただけどー」

リアちゃんがそういつてこつちに一冊の厚い本を差し出してきた。

『黄泉の死霊召喚実験記録』

これまたわかりやすいタイトルだ。こういうのって嚴重に保管しておくべき物なんじゃ…。

「…どうやらこの屋敷の人間が書いたようですね」

シラヌイが自分の考えを述べながら中身を確認している。

「内容はある程度は想像がつくけど…何が書いてあるんだ？」

「どうやら降霊術^{ネクロマンシー}で黄泉の国の死神や魔獣を呼びだそうとしたらしいです」

「降霊術か…」

降霊術はその名の通り死後の世界の住人を召喚して使役する術…

……だったと思う。だが世間では禁じられた外法という認識で使う奴らは大抵頭がイカれた連中ばっかだと聞いている。

「僕にも見せて…」

カイがシラヌイから本を受け取って中を確認する。俺もちょっと気になって隣から覗き込む。

「あれ？途中からなにも書いてないよ？」

リアちゃんの言う通り記録が止まっている。

「恐らくは召喚した死霊を使役できずに逆に魂を黄泉に連れていかれたのでしょ…」

シラヌイの言っている事は十中八、九当たっているだろう。

術者の魔力よりも上の力を持つ死霊を召喚してしまった場合、大抵は制御仕切れず自分が黄泉の国に連れていかれると聞いた。ここに住人もそうなってしまったのだろう。

「……………もしそうならヤマト君が危ないよ！」

確かに。ヤマトは魔法が全然使えないみたいだ。強いていえばあのオヤジが作った魔法武器に記憶されている魔法ぐらいか。もしその死霊が今もこの屋敷にいるとしたらアイツじゃ勝ち目が無いな。

「つたく、大丈夫かよアイツ…」

今頃泣いたりしていなきゃいいが…。

第十六話 ぶっちゃけ話を通じるなら多少はマシだ（前書き）

おそらくこれからも亀のごとき更新速度になるかもしれませんが読んでいただけたら嬉しいです。

第十六話 ぶっちゃけ話が通じるなら多少はマシだ

「…なんだこりゃ」

俺は今大きな鉄の扉の前に立っていた。

あの後数分ぐらい歩き回っていたら発見した。開けようとしたがピクともしない。俺の倍くらいの高さはあるし厚さも相当あるのだろう。

「あら…珍しいね、ここに来れる人がいるなんて」

「?!」

突然後ろから声がして、反射的に振り返り声の主を確認する。

俺の視界に入ったのは紅いドレスを着て、髪を後ろで一つに纏めている綺麗な女性だった。

「……………誰だ、あんた」

「あら、人の名前を聞くときは自分から名乗るものじゃないの?」

「……………大和。日下部大和だ」

「アタシはアンジエ、この屋敷の主よ。よろしくね」

「アンジエ…さんが。この屋敷は無人だって聞いてたけど」

「ああ、それは嘘。それにそもそも君達のギルドに依頼を出したのはアタシなの」

「…なんで俺達がギルドの人間だって知ってるんだ?」

「アタシ、この屋敷の中ならどこでも見ることが出来るの。これでも「千里眼」という特殊属性を持つてるからね」

「「千里眼」? 特殊属性?」

初めて聞いた単語を思わず口に出す。

「うん。千里眼ていうのは離れた場所の様子を見たり聞いたり視力を強化することができるの。アタシは千里眼は得意じゃないからこの屋敷内を見渡すのがやっとだけだ」

そんな便利な魔法があるのか。アホが聞いたら喉から手が出るほど欲しがりそうだ。

「特殊属性っていうのは？」

「これは種族に関係なく使える魔法のことなの。特殊属性を使えるかどうかは家系によるところが大きいといわれているわ」

「ふーん。ところでほかにも聞きたい事があるんだけど……」

「アタシに答えられる事ならいいわよ。…あ、でもスリーサイズはちよつと恥ずかしいかな」

そんな事をサラつと言えることを恥ずかしく思っただけ。

「ちなみにアタシ、ゴーストだから体重はありません」

……今サラつと変な単語が混ざってなかったか？

「今、ゴーストって聞こえたような……」

「うん、アタシゴーストなの」

……そうなのか……。ドレスに隠れてよくわからないが文字通り足が無いように見える。いや見えないか。嘘を言っているようにも見えないし本当なんだろう。

「まあそれはそれとして次の質問だ。この屋敷にゾンビや幽霊がいるのはなんでなんだ？」

俺が一番聞きかかった事を聞いた。

「それが…アタシにもわからないの」

「は？」

「数日前に突然人間がきたかと思っただら一階の実験場に籠って結果を張って誰も入ってこれないようにしたの！」

「はあ……」

「「千里眼」で見ようとしてもそいつのいる部屋だけは見ることが出来ないのよ！人の屋敷で何様のつもり？！」

「いや、俺に言われても……」

「…ごめんなさい。取り乱しちゃって」

少し落ち着いたようだ。それにしてもその人間てのは一体何者なんだ？もしかしてゾンビやら幽霊やらもその男の仕業なのか？

「その実験場はどの辺りにあるんだ？」

「…一階の一審奥にあるわ」

「なるほど」

「かつて死神を喚びたそうとして今は封鎖してあるの」

死神……魂を持っていくのが仕事の連中か。ここは異世界なんだしそういうのがいても不思議じゃないか。

「…もしかしてこの扉の奥にあるのとの関係あったりする？」

「大アリよ。この先には死神が封じてあるの」

「ええ?!」

そうなの?! どうしよう。俺さっき開けようとしちゃったんだけど!

「大丈夫よ。これを開けるにはとてつもない量の魔力が必要な。普通ならエルフが十人掛かりで一生涯魔力を注いでも開いたりしないわ」

エルフの寿命がどれくらいかは知らないが、要するによっぽどの事が無い限り開かないということか。

「ところでヤマトクン、ちょっと気になってたんだけど…君の魔力、なんだか変な感じがするよ？」

「俺の魔力が変? 確かに俺魔力は少ないらしいけど…」

「………なんていったらいいのかな。ヤマトクンの魔力は穴に栓がしてあって外に出るのを防いでいる…という感じかな。とにかくヤマトクンの中には凄い魔力が眠っているような気がするんだ」

凄い魔力ねえ。もしそうなら俺は魔法が使えるかもしれないな。そうだといいな。

「なにかきつかけがあれば…」

「あ、そうだ一番聞きたかったことをすっかり忘れてた!」

「ん? なに?」

「………出口ってどこにありますか?」

この屋敷の主って言うなら地上への道を知っているはず。こんな所で白骨死体になんてなりたくない!

「ああ、それならアタシが入口まで送って行ってあげるよ。ヤマトクンの仲間もちょうどロビーの辺りに集まっているみたいだし。それ

にヤマトクン、オバケが苦手だしね」

「俺は幽霊とかが苦手と言う訳ではない！ただ、見たり聞いたりすると体中が寒気を覚えるだけだ！」

「それを苦手っていうんじゃない？」

失礼な、なぜそう思われたいといけないんだ！俺ほど肝が据わっている人間はいないというのに！

「それじゃ今から魔法を使うから目をつぶってね」

「あ、ああ」

言われた通り目を閉じる。

「風の使いよ。私の望みし光景に運びたまえ！ゲイル・ムーブメント！」

アンジエさんが呪文を唱えると体が何かに溶けていくような感覚を味わった。

第十七話 口は災いの元……。これを考えた人は天才だと思う今日この頃

「ヤマト見つからないねー」

「やはりあの時クライスを落として探させるべきでした…」

「おい、俺をいつたい何だと思つてやがる！」

「クライス君…落ち着いて…」

俺達は今入口の扉の前に集まっている。つーかなんでシラヌイはあんなに暴力的なんだ？この前もただ美しいエルフの女性を口説いていただけで容赦なく跳び蹴りを浴びせて来やがった。何の恨みがあるつて言つんだ？

「ヤマトだいじょーぶかなー？」

「きつと大丈夫だよ…！」

「今頃泣き喚いているんじゃないか？」

「うわああああ？！」

「ゴブエ?!」

アンジエさんに魔法で送ってもらった先はアホの真上だった。アホがクツションがわりになって俺には特にダメージはない（アホの事は気にしない方向で）。

「ごめんごめん。これやるの久しぶりだからちよつと失敗しちゃった」

これ以上ないくらいの笑顔で謝罪の台詞を吐くアンジエさん。全然謝罪の念を感じられないがそこは気にしたら負けだ。

「え？ヤマト？」

「な、なぜいきなりクライスの上に?!」

「だ、大丈夫…？」

側に駆け寄る仲間達。ああ、カイの心配そうな顔に癒され…アカ

ンアカン！男になにを感じてるんだ俺は！

「へえー、ヤマトくんはこういう子が好みなんだー」

「え…？あのヤマト君、この人は…？」

「きれいな人だねー」

「なぬ！美人?!」

アホが素早く立ち上がりアンジェさんの前までいった。アホの体は性欲で動いてんのか？

「初めまして、美しい人。私の名は貴女だけの騎士、クライス。よろしければ貴女のお名前を聞かせて貰えませんか？」

「あら、ありがと。アタシはアンジェ。よろしくね〜」

「アンジェさん！素敵なお名前だ！アンジェさん、今この屋敷は危険です。どうか私に貴女を安全な所までエスコートをさせてレデエツ?!」

「本当にあなたは見境がありませんね…」

「あれ…？この人もしかして…」

カイがなにかに気づいたらしくアンジェに鋭い視線を送る（鳩尾に一撃を入れられたアホは当然の如くスルー）。

「あれ、わかった？そう、アタシゴーストなの」

「ゴースト…？ですが自我を持つゴーストは普通はいないはず…」

「へ？どういうこと？」

「ゴーストは自我を持たない魔物なのです。自分からゴーストにならない限り…まさか」

「うん、そうなの。昔、いろいろあつてね…」

言葉を切って遠い目をする。なにか事情がありそうだがあまり突っ込まないほうがいいだろう。

「ああ、そうだ。依頼人はこの人なんだって」

「そうなんだー」

「ゴーストが依頼人とは…」

「で、でも悪い人…ゴーストじゃなさそうだよ…」

「そうだぞ！いくら身長や胸の大きさを負けてるからってゴブエ？

「!!」

「一生喋れない体になりたくなければ……分かりますね？」

シラヌイからもものすごい殺気が溢れ出ていた。アホも学習しないな。

「へんじは？」

「はい！黙っていますシラヌイ様！」

そういつてアホは正座をして大人しくなった。今、シラヌイの背後に阿修羅が見えたような気がしたが目の錯覚だと思っことにしよう。

「……まあ、確かに悪い人……というかゴーストではないようですね……」
「そうよー。アナタの好きな人を取ったりなんてしないから安心してー」

「だ、誰が誰をですか！あんな軽い男、こつちから願ひ下げです！別にクライスとは言っていないんだけど……。わかりやすいな。」

「そういやアンジェさん。さっきの話の続きいい？」

「うん、そうだね。ヤマトクンの仲間も皆居ることだしね」

「死神?!そんなのが?!」

「へえーすごいねー」

「……………」

「ど、どうしよう……」

アンジェさんがこの屋敷や依頼などの説明をした後に四者四様の反応をした仲間達。てかりアホは全然危機感を抱いてないな。

「その人間のいる部屋に案内してください！この私が懲らしめて差し上げましょうー！」

アホの脳内に「反省」と「自重」の二語はないらしい。後ろからシラヌイが鬼も殺せそうな視線をぶつけているというのに。

「それじゃヤマト！いっくよー！」

突然俺の腕をホルドしたりアホ。

「ちよ、行くつてどこに行くか分かってるのか?!」

「まあまあ、アタシが案内するから」

「ぼ、僕も行く…」

「ああリアちゃん！待ってくれ！腕を組むなら俺と」

「死にたくないのなら私の視界内で大人しくしていることです」

「グオオオオオオ！！腕が不思議な方向に曲がるううう！！」

ズンズンリアに引つ張られながら俺はアンジェさんが言った人間のいる部屋に向かっていった（アホはシラヌイに逃げられないように折れそうな程の力で腕を捕まれて引きずられていたが皆はスルーしていた）。

第十八話 どうしようもなく腹が立つやつは一発殴っておこう

「ここか……」

アンジェさんの案内で謎の人間がいるという部屋にたどり着く。

「アンジェさん。貴女のの顔に必ずや笑顔という素敵なたを咲かせて見せましょう！」

「あなたの頭に真っ赤な血の花を咲かせたくなければ早く扉を開きなさい」

「ウツス！……あれ？開かないんだけど……」

アホが扉を開けようと力を込めて押しているがビクともしない。

「鍵が掛かっているのか？」

「違うの。あの人間が結界魔法を使っているから、物理的な干渉が出来なくなってるの」

「？ アンジェさん、どゆこと？」

俺は結界魔法の事をアンジェさんに聞いてみる。

「結界魔法は法術の一種で魔力で出来た壁を作る魔法なの。魔力が強い人だと物に結界魔法を掛けて強度を上げたりするの。多分あの人間はこの扉の鍵を閉めてから結界魔法を使って邪魔者の侵入を防いでいるんだと思う」

「ふーん……」

とりあえず防御魔法みたいな物ってことか。魔法の事はまだよくわからないし、今度ウィリアスさんに教えてもらおう。

「この結界の属性が何かは分かりますか？」

シラヌイがアンジェさんに尋ねる。

「うーん……。多分、闇かな」

「……それならカイ、この結界を消して下さい」

「う、うん……」

「消すって……そんな事が出来るのか？」

隣にいるアホに聞いてみた。

「ああ。カイは光属性の魔力を持つてるからな。相反する属性の魔法をぶつければ魔法を消しやすいんだよ」

アホが説明を入れてくれる。なるほど、要するに弱点を突くってことか。

「それじゃ行くよ……。邪悪なる魔の加護を滅せよ！ディスプレイライト！」

カイが呪文を唱えると光が扉を包み込んだ。

「……これで大丈夫だと思うよ……」

カイは少し汗をかいていた。今の魔法ってそれなりに負担が掛かるのかな？ リアは平気で魔法をぶっ放してたが。

「どれどれ……。おっ、開いた開いた……」

アホが扉を開ける。今の台詞だけ聞くと泥棒みたいだ。

さて、俺も部屋の中にお邪魔しますかね。

「……ほう。この私の結界を消すとは……、ただの子供ではないようだな」

部屋には黒いローブを羽織った男がいた。顔はフードで隠れて分からないが背は百八十くらいはありそうな長身の男だ。

「お前か！ アンジエさんの屋敷に土足で侵入した輩は！ 今から俺が成敗してやるから覚悟しろ！」

アホが前に出て男に叫ぶ。だが男はアホの啖呵を意に介さない様な風はこちらを向いた。

「もう少しで死神の力を手に入れる事が出来たというのに……」

「死神の力？ なんでここに死神がいることを……」

アンジエさんが男に問いかける。

「なあに、腕の良い情報屋がいてな。そいつに聞いたのさ」

「なんで死神の力を手に入れようとするの？！ そんな事をしようとしても無駄よ！」

「それはどうかな……」

そう言っつて男は懐から紅い色の珠を取り出した。珠の中の紅が動

いているのが不気味だ。

「何それ……？　すごい量の魔力を感じる……」

「ああ。これには百人分のエルフや人間の魔力を吸収して凝縮してあるからな」

「な……？！　そんな事をしたら……！」

「そうだな。この世界の生物は魔力が枯渇すれば死ぬ。魔力を吸い取られた者は皆死んだ」

「……つまり、あの珠は人の命を使って創られた珠なのか？」

「だが全ては我らの望みを叶えるのに必要な事。彼らの命は無駄ではない。彼らの魔力と引き換えに死神の魔力をこの珠に封じ込め、あのお方を復活させるために生贄になってもらった」

「……話はイマイチ掴めないが分かるのは、こいつが多くの命を奪ったって事だ。」

「……あのお方ってのは誰だ？」

俺は沸き上がる感情を抑えながら男に聞いてみる。

「ふん。なぜ教える必要がある？　お前達はここで我らの野望の生贄になるというのに」

「……男は俺達を生かして帰すつもりはないらしい。だが俺も、ただで帰るつもりはない。」

「……なあ皆、ああ言ってるけどどうする」

仲間達の方を向いて問いかける。

「うーん。話はよくわからないけどあの人悪い人なんだよね。なら懲らしめないと！」

「リアちゃんの言う通り！　……それに俺、ちっと腹が立ってきた所なんだな」

「多くの命を奪ったようですからね……。……報いは受けてもらわないと……」

「僕も許せない……。あんな風に命を弄ぶなんて……」

皆やる気は十分のようだ。こりゃ聞く必要はなかったな。

「ほう。私と戦うというのか？　余計に苦しむ事になるぞ」

「……あんまり子供だと思ってかかると痛い目見るぜ」

俺はそこで一旦言葉を切る。そして息を吸い込みながら構えをとり、男にこう言ってる。

「行くぜゲス野郎。ちよっくら遊んでやるよ」

第十九話 自分の力を過信するやつは大抵負けるもんだ（前書き）

また更新が遅れてしまい申し訳ありません……。

第十九話 自分の力を過信するやつは大抵負けるもんだ

「この私と戦うと?」

「ああ。依頼人にも頼まれたしな」

「ヤマト君……」

男を正面に見据えながら構える。仲間達も武器を構え、臨戦体制をとる。

「まあいい。貴様等のようなガキ共の相手など大した労力ではない」
男は懐から血のように赤い剣を取り出す。なんだか見ているだけで頭がおかしくなりそうな不気味な気配を漂わせていた。

「リビングデッツ!」

男が叫ぶ。すると床からゾンビがはい出てきた。

「なっ?! なんだこりゃ?!」

「ゆけ! 我が下部達!」

男の命令と共にゾンビ達が俺達の方に向かってくる。

「ヤマト! ビビってんじゃねえぞ!」

「ふん、そりゃこっちの台詞だ!」

アホの言葉に声を張り上げて返す。ゾンビも魔物の一種だと思えばいい。それに落ち着いて見れば動きは鈍いからむしろやりやすいくらいだ。

「いくぜ! スレイプニル!」

アホの手に何処からか出てきた剣が握られる。

「スレイヴ!」

アホが言葉を発すると同時に剣を振る。すると剣の刀身が何倍にも伸びて鞭のようにしなりゾンビ達の頭を次々に刎ねていく。あの剣、あんな事が出来るのか。

「っと、感心してる場合じゃないな」

俺は近くに迫っていたゾンビを見据え、簡単に深呼吸をしながら集中する。

「ハアッ！」

そしてゾンビとの距離を詰め体重を乗せた蹴りを入れる。
ゾンビは後ろにいた仲間を巻き込みながら飛んでいく。

「カイ、法術であのゾンビ達を倒せますか？」

「う、うん……。やってみる……。偉大たる我らが神よ！ 不浄の者達に裁きの光を！ ジャツジメント！」

カイが何かの魔法を唱えると、ゾンビ達が突如現れた光の柱に捕らえられる。ゾンビ達もがき苦しんだかと思っただ瞬間には跡形もなく消え去った。

「ナイス！ 助かったぜカイ！」

ゾンビが消えた次の瞬間にはアホが好機とばかりに男に切り掛かっ
ていく。

「ふん。その程度で私を倒せると？」

「生憎、こっちはお前と違って一人じゃないんでな！」

「その通りです！」

「！」

アホが男と鏝せり合いをしているところにシラヌイが背後から不
意をつく。

「これは使いたくなかったが……。」「バースト！」

「？！」

男が叫ぶとアホとシラヌイの体が吹き飛び壁にたたき付けられる。

「ぐっ……。流石にこれは体への負担が大きいな……」

「シラヌイ！ 大丈夫か？！」

俺は壁に打ち付けられた衝撃で体を満足に動かせないシラヌイの
もとに駆け寄る。

「……私なら……。大丈夫です。それよりもクライスは……」

シラヌイの言葉で俺はアホの方を見る。リアとカイが近くによっ
てアホの状態を確認する。

「俺としたことが油断したぜ……。だがリアちゃんに介抱されるな
ら悔いはない……」

「……どうやら平気みたいだ」

あんな台詞が言えるならまだまだ大丈夫だろう。だが立ち上がったアホは少しフラフラしていた。まだダメージが残っていたみたいだ。

「よくもシラヌイちゃんとクライスをー！ 塵をも残さぬ煉獄の炎よ！ 我が敵を貫け！ インフェルノレイザー！」

今度はリアが魔法を唱えると巨大な炎の渦が男に襲い掛かる。

「なっ？！」「リバースシールド！」

男の体を包む青い球が現れリアの炎を防ぐ。

「まさかこのような高等魔術を使えるとはな……。だが……」

「やらせるか！」

青い球体が消えた瞬間、俺は男との間合いを詰め、男の腹に拳を叩き込む。

「グッ！ だがこの程度で……」

「ハッ！」

男が呻いてできた隙を見逃さず剣を持っている手に回し蹴りを決める。

「しまった！」

男は衝撃で剣を落とす。

「まだまだあ！」

力強く踏み込み男の腹に肘打ちを喰らわせる。

「ガハッ？！」

男が大きくよろめく。俺はそれを見逃さず下から男の顔を蹴り上げる。

「ガッ？！」

そのまま高く天を向いている足を男の腹に向かって落とす。

「ガハア！」

男は声を上げると床に倒れ動かなくなった。

第二十話 朝日が眩しいぜ……。……。カッコつけた訳ではない。

「ふう……………」

男が意識を失ったのを確認し、額の汗を拭う。

周りを見回してみたが、ゾンビはいないようだ。よかった……。

「ねえヤマト君ちよつといい？」

「なんだ？」

「あいつが持つてる珠を壊してくれない？」

「そんな事をして大丈夫か？」

「うーん……………多分大丈夫」

「多分て……………」

「魔力つていうのは一度物にこめられるとその物が壊れたりした時に自然消滅するの。だから珠を壊したりしても問題ないと思うよ」

イマイチよく分からないが大丈夫って事ならいいか。

「それじゃ外に出てから壊すか」

「うん、ありがと」

さて、皆は大丈夫かな。

「いつつ……………まだ体が痛む……………」

「あんな魔法を使つてくるとは……………。油断しました……………」

「怪我をした所があるなら教えて……………。僕が治すから」

「皆だいいしょぶ？」

「ありがとうリアちゃん！ 君が心配してくれるだけでいだだだ耳がちぎれる！」

戦いの後だというのにアホとシラヌイはいつもの夫婦漫才をやっている。リアとカイも平気そうだし全員大丈夫みたいだ。

「おーい、とにかく外に出ようぜ」

俺は皆にそう呼びかける。ぶつちやけ池に落ちたせいで服がかなり臭いから早く着替えたい。

「そうですね。でもまずはこの男の身動きを取れないようにしまし

「よう」

そういつてシラヌイはどこからか縄を取り出す。どこにしまったんだとかなんで持ち歩いてんだとかいったツツコミはしないでおこう。

男に近づいたシラヌイは目にも留まらぬ早業で男の体を縛り上げる。口にさるぐつわを噛ませる事も忘れない。

「クライス。ちゃんとその男を引っ張ってきて下さい」

「ええー、俺疲れてるん……」

「ナニカイイマシタカ？」

「俺はシラヌイ様の奴隷です！」

素早い動きで男を引きずるアホ。こういうときのシラヌイの眼力はおそらくはビームを出せそうなくらいの力を持っていそうだ。

「ほらヤマトもいくよー！ はやくはやくー！」

「ああ分かった。今行くからそんな騒ぐな」

戦いの疲れもあつて、俺達は外の空気を吸うために入口に向かった。

「おお……。なんだか数日ぶりに外に出た気分だ……」

外に出てすぐに深呼吸をし新鮮な空気を吸い込む。周りが明るくなってきたので、もうそろそろ夜が明けてきたのだろう。

「つと、この珠を破壊しとかないとな」

そう呟いて珠を地面に置いて脚を持ち上げ、脚に力を込めて珠を踏み付けた。珠が粉々に砕けた瞬間何かが体に吸い込まれていくような感覚がした。

「これで大丈夫か？」

「うん。これで珠に吸収された魔力は消えたわ。これで命を奪われた人達の無念も少しは晴れるかな……」

安堵の表情でアンジェさんが告げる。男はこれを使って死神の力

を手に入れるつもりだったらしいからな。男の野望を砕いたことになる。

「……………」
するといつの間にか気がついた男から殺意の籠った視線を向けられていた。

「よう。目え覚ましたみたいだな」

「……………」
「なんだ？ 舐めていたガキ共に負けたらショックが大きすぎて声も出ないのか？」

「……………」
男は喋ろうとさえしない。黙秘主義だと困るんだけどな。

「まあいいや。お前のやろうとした事は俺達が阻止したわけだ。何か言いたいことがあるなら今のうちに聞いておくけど？」

「……………」
「ヤマトさん、とりあえずこの男の身柄を騎士に引き渡しましょう」
「シラヌイの言う通りだ。アンジェさん、私とこの後鼻が折れちゃうううううう！」

流れるようにアンジェさんをデートの約束を結ぼうとしたアホの鼻をシラヌイが力強く握った。

「早くしなさい。さもないと上から順に曲げていきますよ？」

「わかった！ わかったから早く離してくれえええ！」

シラヌイはまったく…………と呟きながらアホを解放する。

「うう…………。俺、なんか悪い事したか…………？」

鼻をさすりながらシラヌイを見るアホ。モテたがりなくせに結構鈍いな。

「とにかく早くいこうぜ。俺も宿に戻って早く体を洗いたい…………」
考えないようにしていたが実は池に落ちたせいで服が汚れているし結構臭う。うう…………、臭いがきつい…………。

「みんな早く行こー！」

リア、近いんだからそんなに大声で叫ぶ必要はないぞ。

「まったく、このまま終わるといいんだけどな……」

第二十一話 嗚呼、神様の素敵なサプライズに涙が出てきやがった。

「よし。あいつも騎士の連中に引き渡したし、イザ！ 女性巡りの旅にゲフツ?!」

「地獄巡りの旅に行きたいのですか？」

屋敷を出た俺達はこの街に滞在する騎士団にあの男を引き渡し、噴水のある広場でのんびりしていた。

「俺はいつたん宿に戻って着替えてくる。臭くてたまらん……」

出来る限り気にしないようにしていたが緊張がほぐれると途端に我慢出来なくなる。牛乳が染み込んで一週間ぐらい放置された雑巾並に臭い……。

「それでは夜まで自由行動としましょう」

「さんせー！ それじゃわたし遊んでくるー！」

「あ、おいリア！」

リアは待つてましたとばかりに走って行ってしまった。あの精神幼女はどんだけ子供なんだ……。

「リアは私が見ていますので皆は宿で休んでいてください」

「そうか。すまん」

「わかった……」

「俺も行き」

「あなたはダメですよ」

「わかった！ わかったから踏むな！」

シラヌイがアホの足をグリグリと踏み付けながら釘を刺し、リアを追っていった。

「二人はどうする？」

夜までの時間のすごし方を二人に聞いてみる。ま、アホはなんとなく想像がつくが。

「俺もリアちゃんみたい遊ぶ……と言いたい所だが先に明日の馬車を予約するわ。……あんな地獄を繰り返さない為に時間をかけて

でも安全なのを選ぶ」

アホの言葉を聞いて二日間の地獄旅行の苦しみを思い出す。暴走
運転、ダメ、絶対。

「そうだね……ヤマト君は先に宿に戻ってて……」

「ああ。それじゃ先に宿で休ませてもらうわ」

あの後宿に戻ってゆつくりと休憩を取りながらすぐに戻ってきた
アホとカイと共に皆が戻って来るのを待った（宿への道を間違えて
戻るのに余計な時間がかかってしまった事は秘密だ）。

「ただいまー！ 楽しかったー！」

リアが帰ってきた。アイツはいつもテンションが高いな。

「リアちゃん、シラヌイちゃん。おかえり……」

「リアちゃん！ この後俺とも楽しい事をペゴツ！」

「なにを言ってるんですか？ この後はアンジエさんに会いに行く
予定ではありませんか」

そう。俺達はアンジエさんに「日が落ちてからまた屋敷に来てほ
しい」と言われている。特に断る理由もないし日も落ちかけている
ので行くつもりでいる。

「それにしてもなんでまた夜なんだ？」

「えっと……ゴーストは日が出ている間はあまり自由に動けないん
だ。だからじゃないかな……？」

へえ、そうだったのか。なら時間を夜に指定したのも納得だ。だ
けど夜に用事と聞くとなんだか卑猥な感じに聞こえる。それは俺だ
けだろうか。

「まさかアンジエさんは俺と夜のイケナイ密会をしたいが為にガハ
ゴブゲバツ?!」

シラヌイに目にも留まらぬ速さで三回殴られたアホ。よかった、
俺だけじゃないみたいだ。

「みんなー早くいこー！」

「わかったからあんまり騒ぐな」

いつの間にかドアを開けて外に出ようとしていた。……にしてもなんでリアはああも元気なんだ？ 見てるこっちは疲れる気がしてくるんですが。

「うん……そうだね」

「はい。ほらクライス、行きますよ」

「……………」

カイが俺の後ろに続き、意識を失ったアホをシラヌイが引きずるのんびり行くとしますかね。

「いらっしやーい。ゆっくりして行ってね」

屋敷の玄関の前でアンジエさんが待っていた。なんだか生き生きとしてるように見える。

「アンジエさん、何の用なんだ？」

「うん。アイツを屋敷から追い出してくれたお礼をね」

「ああ、そっぴやアンジエさんが依頼人だったんだっけ」

「依頼人として報酬をね。まあそれはヤマト君だけになっちゃうんだけど……………」

「なに?! ヤマトずりいぞ！ 俺と代わりパゴツ?!」

「あなたは喋らないでください」

「どうしてヤマトだけなのー？」

リアがアンジエさんに問い掛ける。なんで俺だけなんだ？

「まっ、それは知ってからのお楽しみ」

アンジエさんが俺の前へ来て両腕を突き出した。いったい何をする気なんだ？

「動かないでね……………」

アンジエさんが目を閉じる。すると体のまわりを緑色の光が包み

こんだ。

「え？ なにコレ、俺になにが起こってるの？」

俺だけではなく仲間達も戸惑った顔を浮かべていた。

「……ふう」

一分後、アンジエさんが腕を降ろし、俺を包む光が消えた。

「アンジエさん、俺に何をしたんだ？」

「……ヤマト君の中に眠る魔力を引き出してみたの」

「俺の魔力を？」

「前にも言ったけどヤマト君の魔力は穴に栓をしてあるような状態なの」

「確か俺の中にすごい魔力が眠ってるかもしれないんだっけ」

「ええ。その栓をアタシの魔力で開けてみたの。でも何か強力な封印術がかけられているみたいであまり魔力を引き出せなかった……。ごめんね……」

「……でもそれで俺の魔力が強くなったって事か？」

「うん。一応ね」

「それだけでも有りがたい。アンジエさん、サンキューな」

「どういたしまして」

アンジエさんにお礼を言う。これで俺も魔法を使えるようになるかもしれない！ 魔法使いたい！

「それとフェンリルクロウの皆さん」

アンジエさんがこちらを見る。

「本当にありがとうございます！ たまには遊びに来てね！」

「うん！ また遊びに来るねー！」

「たまにと言わず今からでも夜のデートをクビガシマルウウウ！」

「また何かありましたら私達のギルドにご依頼ください」

「うん……よろしく願います……」

そう言っただけで俺達は屋敷を後にする。アンジエさんか……。幽霊だけ結構いい人だったな。

「さて。のんびり馬車の旅を楽しみながら帰るぞ！」

翌日、俺達は街の入口の前で馬車が来るのを待っていた。なんかいろいろとあつたな……。

「にしても遅いな……」

「なにかあつたのかなー？」

時間になつても馬車が到着しないので待ちぼうけをくらっている。まあ、仕事は終わったし少しくらい帰るのが遅れても……。

「おや、来たみた……ン？」

「……あれは……まさか……?!」

「え……? 嘘だよ……?」

馬車が来たみたいだ。だが皆それを見て顔に恐怖の色が浮かべている。それもそのはずだ。なぜなら馬車を操る人物は二日間頭文字がDの人達もビックリな運転を馬車で披露してくれたあの人だったからだ。

「やあ皆さん……お仕事ご苦労様です……」

「ラ、ラードさん……なぜあなた……」

俺の目が悪くなったのでなければラードさんが馬車を引いているように見える。カイとアホは確か昨日、普通の馬車を頼んだって言うっていた。この人が来るのはおかしい。

「なんでも昨日捕まった犯罪者が脱獄して逃げる為に馬車を奪ったらしいです……。そこに私に代わりの依頼が来たんですよ……」

犯罪者……まさかあの男か！ あの野郎……今度あつたら絶対に息の根を止めてやる……！

「それではどうぞ皆さん乗ってください……」

「はい！ みんなはやくー！」

リアは元気な返事をして馬車に乗り込む。断るわけにもいかず俺

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0649t/>

Let's 異世界ライフ！

2012年1月9日01時28分発行